

津和野町埋蔵文化財報告書

津和野城下町 祇園町遺跡

1999年3月

津和野町教育委員会

序

山陰の小京都として知られる津和野町には、恵まれた自然環境の中で先人たちが生活していた証である貴重な文化財が数多く残されています。そして、現在の津和野の町並みは、江戸時代に整備された城下町が基礎となっています。

今回、津和野郵便局庁舎新築工事に先立って発掘調査をおこない、津和野城下町遺跡で初めての本格的な町屋跡の発掘調査となりました。今回の調査は小規模なものでしたが、城下町の成立期を知る手がかり、幾度にもわたる大火を裏付ける焼土層、大量に廃棄された陶磁器の一括資料など、これまで知られていなかった新しい事実が発掘調査を通じて次々と明らかになってきました。

本書が埋蔵文化財の理解・普及に寄与し、学校教育・社会教育・学術研究の一資料として活用いただければ幸いです。最後になりましたが、発掘調査に際して多大なご理解・ご協力をいただきました中国郵政局及び関係各位に対し、心より厚く御礼申し上げます。

平成11年3月16日

津和野町教育委員会

教育長 斎藤 敦弘

例言

1. 本書は、津和野町教育委員会が1997・1998（平成9・10）年度に中国郵政局から委託を受けて実施した、島根県邑智郡津和野町大字後田字堀塚町に所在する祇園町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査にあたっては、下記の方々に文献・陶磁器・構造など多くの内容をご指導いただいた。この場を借りてお礼申し上げます。（敬称略）
鈴川 兼光（津和野町文化財保護審議会会長）、村上 勇（広島県立美術館）、渡辺 一雄（梅光女子学院大学）
3. 調査にあたっては、下記の方々にご協力いただいた。また、近世城下町発掘調査実施の関係機関の方々には多数の報告書をご恵送いただいた。この場を借りてお礼申し上げます。（敬称略）
池田邦郎、河野晃、古賀信幸、斎藤昌雄、財閥至宏、須佐町歴史民俗資料館、谷口哲一、西尾克巳、秉安和二三、根鈴輝謙、藤本隆之、増野晋次、松井章、守岡正司、柳浦俊一、湯村功
4. 自然科学分析業務は、環境考古研究会 金原正明・金原正子氏に依頼し、玉穂を賜った。この場を借りてお礼申し上げます。
5. 本書に用いた方位は、第1・2図は真北、第5図以下は国土測量法第II座標系に基づく座標北である。建物群の主軸は座標北からの値である。
6. 遺構番号は各区ごとの通し番号とし、遺構の種別・時期差による分類はしていない。本書中に用いた記号Sは、遺構の略号としてもちいた。（例：4-S1、4区1号遺構）
7. 調査に伴う記録類及び出土遺物は、津和野町教育委員会で保管している。
8. 本書は山本・永田・榎本の協力のもと、宮田が編集にあたった。

目次

I.はじめに	1
II.位置と歴史的環境	1
III.調査の概要	3
IV.まとめ	31
[付録]祇園町遺跡出土遺物の自然科学分析	(金原正明・金原正子)34

I. はじめに

1. 調査の経過

平成9（1997）年4月、中国郵政局より津和野郵便局庁舎新築工事地内の埋蔵文化財の有無、及びその取扱いについての照会が津和野町教育委員会になされた。これに対して津和野町教育委員会では、対象地に近世の津和野城下町遺跡が存在している可能性があることから、試掘調査による確認が必要である旨を回答した。同年5月6日～16日、當時駐車場であった部分について2カ所の試掘調査（1・2区）をおこなった結果、1区で近世の焼土面6面を確認、2区で近世前半期に相当する可能性の高い埋桶遺構などを確認し、城下町遺跡が非常に良好な状態で遺存していることが明らかとなった。その後、中国郵政局と町教委で協議をおこない、遺跡発見通知・遺跡発掘通知を提出することとなり、郵便局庁舎取り壇工事終了後の平成10（1998）年3月に本発掘調査をおこない、翌年度に発掘調査報告書を作成することになった。

発掘調査（3～6区）は同年3月3日より開始し、3月26日に終了した。調査期間中、発掘調査説明会を開催したところ、荒天にもかかわらず多くの見学者の来訪があった。また、発掘調査終了後の平成10年度前半には、町民センターロビーで発掘速報展を開催した。

2. 調査体制

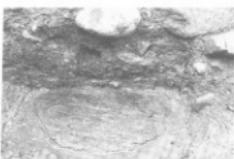
今回の調査体制は、下記のとおりである。

調査主体	津和野町教育委員会	教育長	斎藤 数弘
事務局	//	教育次長	益成 鑑
	//	文化係長	広石 修
	//	文化係	山本 博之
調査担当者	//	文化係	宮田 健一
調査員	//	嘱託	永田 茂美
調査補助員	//	臨時職員	椋木 牧子
	//	//	藤井 晴子

発掘作業員 岩本吉雄、大野浩也、大山和秀、岡田忠良、落合郁雄、斎藤やす子、長嶺春夫、柳井清、山本幸正、和崎正



試掘1区東壁土層断面



試掘2区埋桶遺構(2-SI)



発掘調査説明会

II. 位置と歴史的環境

祇園町遺跡は、現在の津和野町市街地がある盆地の北端、標高154mの場所にある。

中世津和野の領主吉見氏は、弘安5（1282）年に元寇再備のため能登国から津和野北部の木部地区に入り、その後14C代に津和野城を構えたと伝えられている。中世の津和野城の大手口は近世以降の大手口とは反対側の喜時雨にあったと伝えられ、祇園町遺跡のある大字「後田」は城の後ろであったことを指し示すものと考えられている。これまでの発掘調査により、津和野城の大手であった西側の喜時雨遺跡・高田遺跡で中世武士団のものと見られる遺跡を確認している。

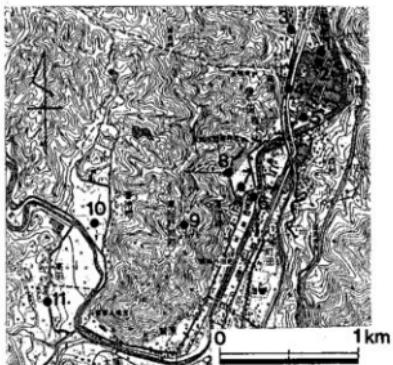


図1 祇園町遺跡位置図 (1/35,000)

- | | |
|---------------|------------|
| 1. 祇園町遺跡 | 7. 津和野藩御殿跡 |
| 2. 幸盛寺跡 | 8. 興源寺跡 |
| 3. 吉見少将正頼夫人の墓 | 9. 津和野城跡 |
| 4. 山根遺跡 | 10. 菩提雨遺跡 |
| 5. 津和野藩校養老館 | 11. 高田遺跡 |
| 6. 旧津和野藩邸馬場先櫓 | |



図2 発掘調査対象範囲 (1/2,500)



図3 元禄期の城下絵図 (文献1に加筆)

る。近世城下が展開した東側では、発掘調査が少ないこともあって中世遺跡の確認は少ないが、寺社、石塔などが盆地西辺に点在している。

関ヶ原の戦後、吉見氏は毛利氏に伴い萩に移るが、その後坂崎出羽守直盛の16年間の治領となり、津和野城の大改築・城下町整備が行われた。坂崎氏断絶の後、元和3(1617)

年に因幡鹿野城（鳥取県鹿野町）より亀井氏が入城し、11代225年間の治世を経て明治維新を迎えることとなる。この間、津和野城下はたびたび大火に見舞われたということが、古記録・伝承などから知られている。祇園町遺跡は、城下町の北端付近の町屋が広がる部分に当たり、東側前面の南北に延びる道筋は山陰道及び津和野奥筋往還であった。北西側には祇園社御旅所があり、南西側には中山鹿之助の菩提寺である幸盛寺があったとされている。



図4 元禄期の城下絵図略図 (文献1に加筆)

III. 調査の概要

調査対象地は、鉄筋コンクリート製であった旧郵便局庁舎部分によって大きく攪乱を受けていることが予想されたため、攪乱が少なく、新たに掘削が行われる部分を中心に計5.4m²の発掘調査をおこなった。調査区名は、試掘調査1・2区の番号を継続して3～6区とした。試掘調査で確認していた焼土層にともなう遺構面を層位的に発掘する必要があることから、まず各区とも調査区縁辺にサブトレーンチを設定して層序の把握に努めた。サブトレーンチで把握した焼土のうち、下面に砂質土をともなう焼土が各区とも認められたことからこの焼土層を鍵層と仮定して第2焼土と仮称し、その上下にある焼土を各区ごとに第0～5焼土とした。よって、別区の同じ番号を持つ焼土層であっても、厳密な対応関係を検証したものではない。調査は、焼土層にともなう遺構面の検出を中心にしておこなった。

1. 遺構の概要

【3区】

焼土は第1～4焼土までの4層を確認した。焼土は3区西半で不明瞭となり、試掘調査2区で焼土層が少なかったことと同じ状況であった。これは、建物が少なく裏庭的な空間に近いことを示すものと考えられる。近現代の攪乱が所々に及んでいたが、各焼土層に対応する遺構面が確認でき、建物基礎石列が良好な状況で遺存していた。

第1焼土下面

建物跡基礎石列（3-S 7）の主軸はN9°Eを計る。調査区南辺の石列がこの建物跡に伴うとすれば、間口3.3mの建物跡が復元できる。

第2焼土下面

建物跡基礎石列（3-S 8）の主軸はN3°Eを計る。北辺の基礎石に比べ、西辺の基礎石は小さい。礎石状のものが少ないことから、部分的に抜き取りが行われ再利用されたことも考えられる。西辺の基礎石は途中で屈折し、基礎石に沿って黄褐色硬質土のタタキ面（3-S 9）が存在していた。3-S 8の東側には石列（3-S 10）がある。いずれも20～30cm程度の小さな石であり、上面が平らな礎石状のものはない。その主軸はN81°W、直交方向の主軸N9°Eを計る。3-S 8北辺の基礎石とはやや主軸が傾き、検出高もや低いことから別時期の遺構である可能性も残る。



第3焼土下面

建物跡基礎石列（3-S11）の主軸はN11° Eを計る。調査区南端付近で基礎石抜き取り痕を確認した。建物跡基礎石列（3-S12）の主軸は、3-S11と同じくN11° Eを計る。3-S11との間は約0.7m、3-S13との間は約1.0mである。建物跡基礎石列（3-S13）の主軸はN79° W、直交方向の主軸N11° Eを計る。3-S11と3-S12の間で溝（3-S14）を検出した。幅約30~40cm、深さ約10cmである。3-S11と3-S12にはほぼ平行しており、埋土が第3焼土であったことから、雨落ち溝が第3焼土にともなう火災によって埋まった跡である可能性がある。この溝は途中で屈曲しており、3-S11が張り出し部を伴っていた可能性を示すものと考えられる。

第4焼土下面

建物跡基礎石列（3-S15）の主軸はN9° Eを計り、東西1.7m、南北2.7mが復元できる。北西隅で基礎石が良好に残っているほかは、全体に残りが悪い。3-S16との間は約0.95m、3-S17との間は約0.3mである。建物跡基礎石列（3-S16）の主軸は3-S15と同じく、N9° Eを計る。南北約1.3mを確認した。建物跡基礎石列（3-S17）の主軸はN81° W、直交方向の主軸N9° Eを計り、3-S15・16と同じ主軸である。東西約2.1mを確認した。

掘立柱建物跡（3-S18）は、3-S15の下で検出したことから、同じ第4焼土下面での検出とした3-S15~17より1時期古い建物跡と考えられる。3-S1~S4の柱穴で構成され、東西2.1m、南北1.8mである。

2層下面

調査区北辺トレンチでの確認に留まったため、詳細は不明な点が多い。溝（3-S6）は幅75cm、深さ65cmの規模である。打ち込まれた杭2本を検出している。トレンチ北壁及び南壁で同様の落ち込みが見られたことから、溝の一部であると推定した。検出範囲が限られていることから断定は難しいものの、その主軸は座標軸方向やや西寄りである可能性がある。同じ調査区北辺トレンチで確認した大型土坑（3

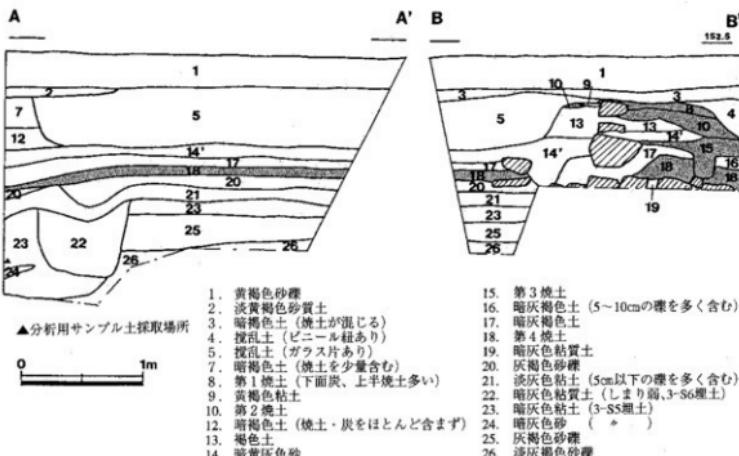
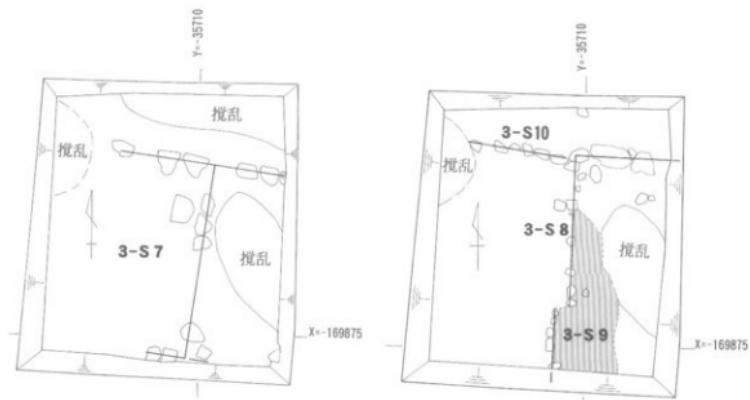
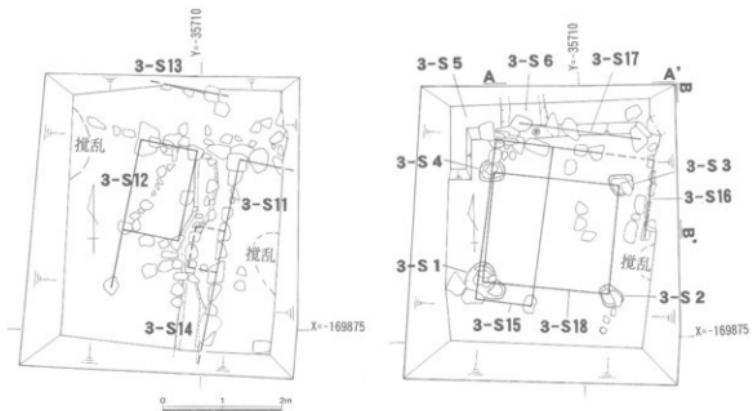


図6 3区土層断面図(1/40)



第1焼土下面

第2焼土下面



第3焼土下面

第4焼土・21層下面

図7 3区遺構平面図 (1/80)



第1焼土下面（南より）

第2焼土下面（南より）

第3焼土下面（南より）

-S 5) の埋土は暗灰色粘土、暗灰色砂が互層状に堆積しており、湿地状の地形であった可能性がある。試掘調査2区20～22層においても類似した粘質土の堆積状況を確認しており、これが同一遺構であるとすると東西9m以上、南北4m以上、深さ0.8m以上の大型遺構となる。15C代の青磁が出土している。

【4区】

3層下面、第1～4焼土下面、18層下面、20層下面が遺構面に相当している。18層は焼土を伴っていないが、5区第5焼土に対応しているものと考えられる。

3層下面

建物跡基礎石列(4-S 7)の主軸はN 11° Eを計る。基礎石の残りは悪い。4-S 7の北約1.2mのところで確認した建物跡基礎石列(4-S 8)の主軸はN 79° W、直交方向の主軸N 11° Eであり、4-S 7と同じ主軸である。基礎石の幅は約60cmと、密に並べられている。このことから、4-S 7とは建物跡の機能が異なっていた可能性があり、蔵の基礎石などが想定される。

第1焼土下面

第1焼土にともなう廃棄土坑(4-S 1)を検出した。土坑の埋土はほとんどなく、火災後に廃棄された大量の陶磁器類(図14～20)のほか、新寛永通寶、銅製品破片、鉄釘が埋まっていた。

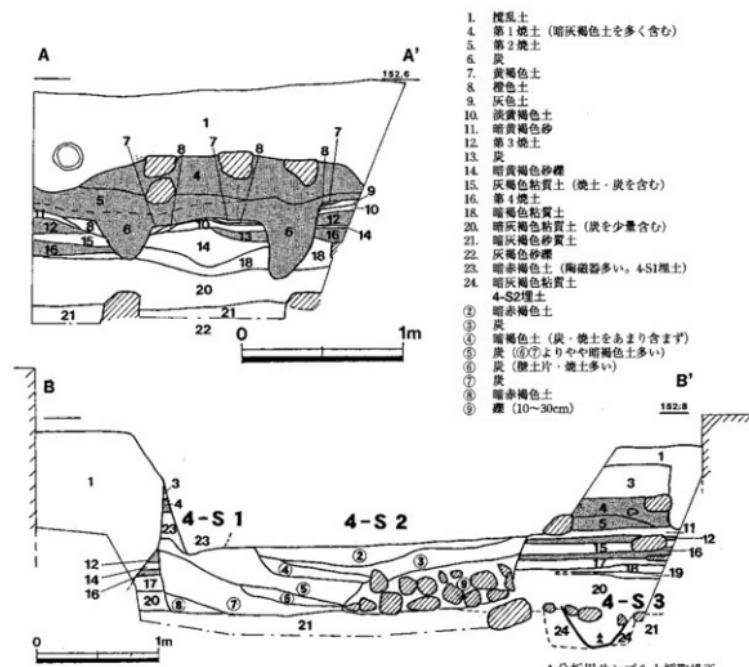
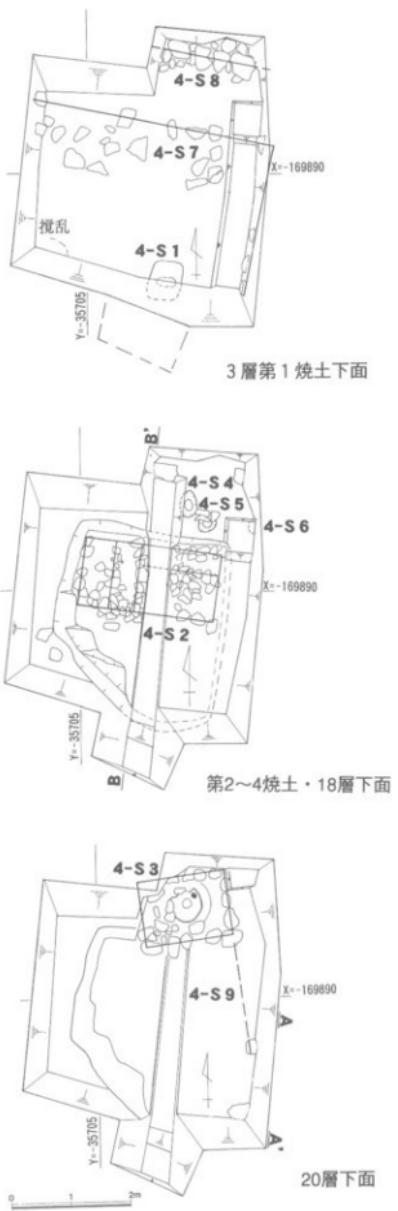


図8 4区土層断面図 (1/30・1/40)

▲分析用サンプル土採取場所



3層下面（西より）



4-S1土層断面（北より）



4-S2検出状況（北より）



4-S2発掘状況（東より）



4-S3検出状況（北より）

図9 4区遺構平面図 (1/80)

第2焼土下面

穴蔵（4-S 2）を検出した。南北約3.3m、東西約2.9m、深さ約0.6mである。南西隅が不整形な形で、壁の傾斜も緩やかであることから、この部分に階段状の通路が存在していた可能性がある。穴蔵北半の底には石が並べられており、この範囲が主に倉庫として使用されていたものと考えられる。土層断面から、第2焼土の火災の後には主に南側及び西側から穴蔵は埋められたと考えられる。遺構内からは、大量の陶磁器類・炭・壁土・炭化穀物が出土している（図21～28）。分析の結果、穀物の大半はコメであり、一部はヒエであった。穀物には炭化材が付着しているものもあり、櫃などの木製容器に入れて保管されていたものと考えられる。これらのことから、4-S 2は穀物を保管していた半地下式の穴蔵であり、大量の壁土の出土から考えると上部は土蔵造りであったと考えられる。なお、4-S 2埋土を覆う第1～2焼土の間層には、4-S 2北西半を中心にして約20cm程度の石の集石が存在していた。

第2焼土下面では他にも礎石状の石を検出しているが、建物跡の復元には至っていない。

第3～4焼土・18層下面

礎石状の石、柱穴を検出しているが、建物跡の復元には至っていない。

20層下面

建物跡基礎石列をともなった埋甕遺構（4-S 3）を検出した。埋甕は瓦質製で、直径約0.8mの穴に埋められており、底から約35cmの当時から地面に埋められていた部分のみが残っていた。底部内面は南側が北側より約1.7cm低く、南側が汲み取り口であった可能性がある。甕の内面北東部に尿の痕跡らしき淡褐色の付着物が認められた。自然科学分析の結果、大便の証拠が乏しいことから、小便専用の便壺であった可能性が指摘されている。4-S 3からは16C後半の遺物が主に出土している（図29）。埋甕の周囲の基礎石列は約20～40cmの川原石を並べてあるもので、南北1.1m、東西1.45mの規模である。基礎石列東辺の延長線上、約1.9mのところには建物跡基礎石（4-S 9）がある。これらの建物跡の主軸はN8°Wを計る。

なお、下層の21層からは、16C前半の青花磁器・土師器皿の小片が出土している。



5区土層断面（西より）

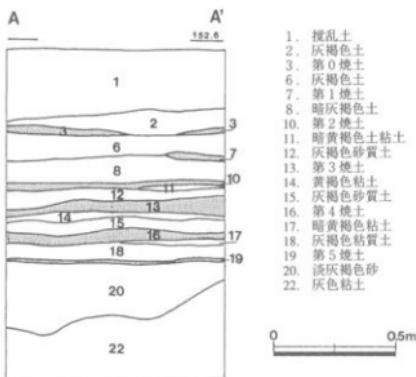
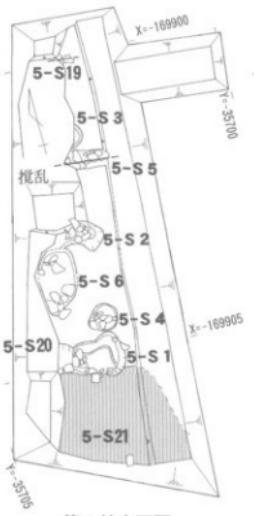
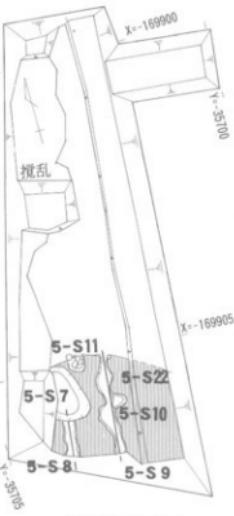


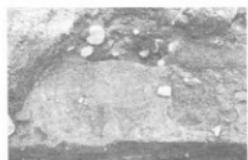
図10 5区土層断面図（1/20）



第2焼土下面



第3焼土下面



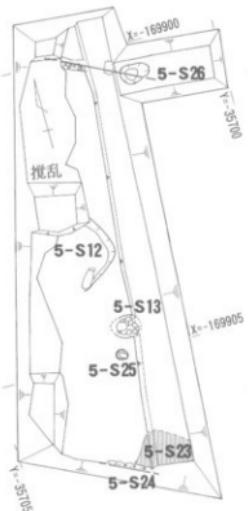
5-S12-21検出状況(東より)



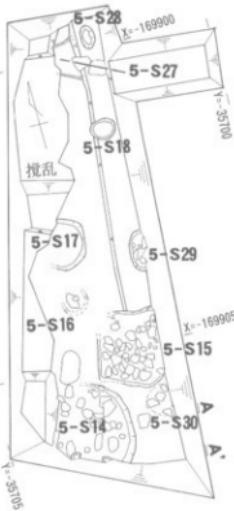
5-S4半掘状況(北東より)



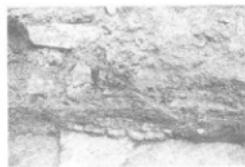
5区第3焼土下面(南より)



第4焼土下面



第5焼土下面



5-S24検出状況(北より)



5-S14-15発掘状況(北東より)

図11 5区遺構平面図(1/80)

【5区】

第0～5焼土を確認した。特に、第3焼土は明瞭な明赤褐色土で、激しい火災を想像させるものであった。遺構が確認できたのは第2～5焼土下面である。調査区の西側は旧郵便局庁舎によって大きく攪乱を受けていた。調査区東西方向の長さが短く、遺構主軸の推定は難しいが、同一遺構面はほぼ同じ主軸であることが多いことを考慮して推定した。調査期間中、旧街道筋である祇園町通りとの関わりを確認する目的で5区北端付近に東方向のサブトレーンチを追加したが、調査区内では顕著な遺構は確認できなかつた。

第2焼土下面

焼土土坑（5-S 1）は、東西90cm、南北75cm、深さ15cmである。焼土・炭が多く含まれ、焼石・約450gの金属塊1個が出土したことから、鍛冶施設であった可能性がある。4-S 1の南側には黄褐色粘土のタタキ面（5-S 2 1）がある。土坑（5-S 2・S 4・S 6・S 2 0）は遺構内に石を伴う。5-S 4からは鉢・甕の一括資料が出土した（図30）。不明遺構（5-S 3）は径40cm、深さ13cmの浅い穴に黄褐色粘質土が埋められ、その上面に円形の炭層が残る。溝（5-S 5）は幅30cm、深さ35cm、中に石が詰まっている。調査区北端では、建物跡基礎石列の一部（5-S 1 9）を確認した。5-S 5・S 1 9・S 2 1の主軸はN 84° W、直交方向の主軸N 6° Eを計る。

第3焼土下面

調査区南端に黄褐色粘土のタタキ面（5-S 2 2）がある。このタタキ面を切って、溝（5-S 8・S 9）が掘られている。5-S 8は幅約20cm、深さ約6cm、5-S 9は幅約15～30cm、深さ約3cmである。5-S 8・S 9は0.75mの間隔を置いて平行しており、その主軸はN 6° Eを計る。他に土坑（5-S 7）、浅いピット（5-S 1 0）、焼石の入ったピット（5-S 1 1）がある。

第4焼土下面

調査区南端に黄褐色粘土のタタキ面（5-S 2 3）がある。その南西側には建物跡基礎石列（5-S 2 4）を確認した。調査区北端では、建物跡基礎石列とその痕跡（5-S 2 6）を確認した。中央に残る基礎石の東側では抜き取り痕、西側では基礎石の下に残された小石群を確認した。他の遺構に土坑（5-S 1 2）、ピット（5-S 1 3・S 2 5）がある。5-S 2 3・S 2 4・S 2 6の主軸はほぼ同じであり、N 63° W、直交方向の主軸N 27° Eを計る。

第5焼土下面

調査区北端で、建物跡基礎石列とその痕跡（5-S 2 7）を確認した。調査区南半では、集石を伴った土坑（5-S 1 4・S 1 5・S 2 9）、焼土硬化面（5-S 3 0）があった。5-S 3 0の下約3cmのところからは上面が平らな石4個が検出された。その他に土坑（5-S 1 7）、ピット（5-S 1 6・S 1 8・S 2 8）がある。遺構主軸の特定は難しいが、5-S 1 5・S 2 7をほぼ同主軸であるとすればN 63° W、直交方向の主軸N 27° Eを計る。

なお、第5焼土より下層である20層中からは主に16～17C代の遺物小片、22層中からは15～16C代を中心とする遺物小片が出土している。

【6区】

攪乱が非常に著しい調査区であったが、2枚の焼土層および3遺構面を確認した。

第2焼土下面

建物跡基礎石列（6-S 6）を確認した。その主軸はN 13° Eを計る。



6区第2焼土下面（東より）

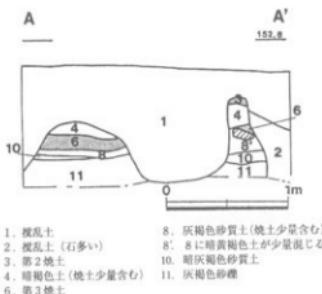
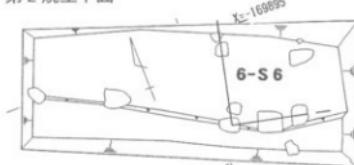


図12 6区土層断面図 (1/40)

第2焼土下面



第3焼土下面



10層下面

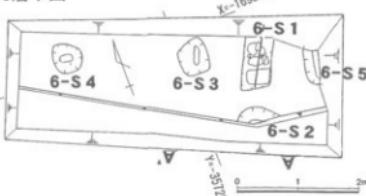


図13 6区遺構平面図 (1/80)

第3焼土下面

建物跡基礎石列（6-S 7）を確認した。その主軸はN 29° Eを計る。

10層下面

土坑（6-S 1）は長さ90cm以上、幅45cm、深さ45cmである。中央部には石が埋まっており、底からは炭が多く出土している。土坑縁近くからは釘が出土しており、木箱が埋設されていたものと考えられる。主軸はN 29° Eを計る。そのほか、ピット（6-S 2・S 3・S 4・S 5）を検出した。

2. 遺物の概要

今回の調査では、コンテナ約30箱の遺物が出土した。紙幅の関係から、一括性のある遺構内遺物を中心に図面を掲載し、その内容は遺物観察表をもって説明に代えたい。なお、今回の出土遺物の大部分が文様のある陶器であり比較的個体識別が可能であったため、最小個体数の算出には個体識別法を用いた。4-S 1・S 2については、遺構を一部掘り込んだ状態で遺構検出したこと、および遺構検出前にサブトレーナーを発掘していたことから、遺構内としての取り上げ番号が1点でもあれば遺構内遺物とみなし、遺構検出前の出土品もその遺構内に含めた。出土遺物のうち灯明皿台、土師器皿については形態差が著しく、代表的なもののみを掲載し個体数を表に示した。また、参考までに1個体あたりの破片数を破片率として掲載し、小数点以下は四捨五入とした。

註(1) 出土陶器の大部分については、広島県立美術館 村上勇氏に御教示を賜った。

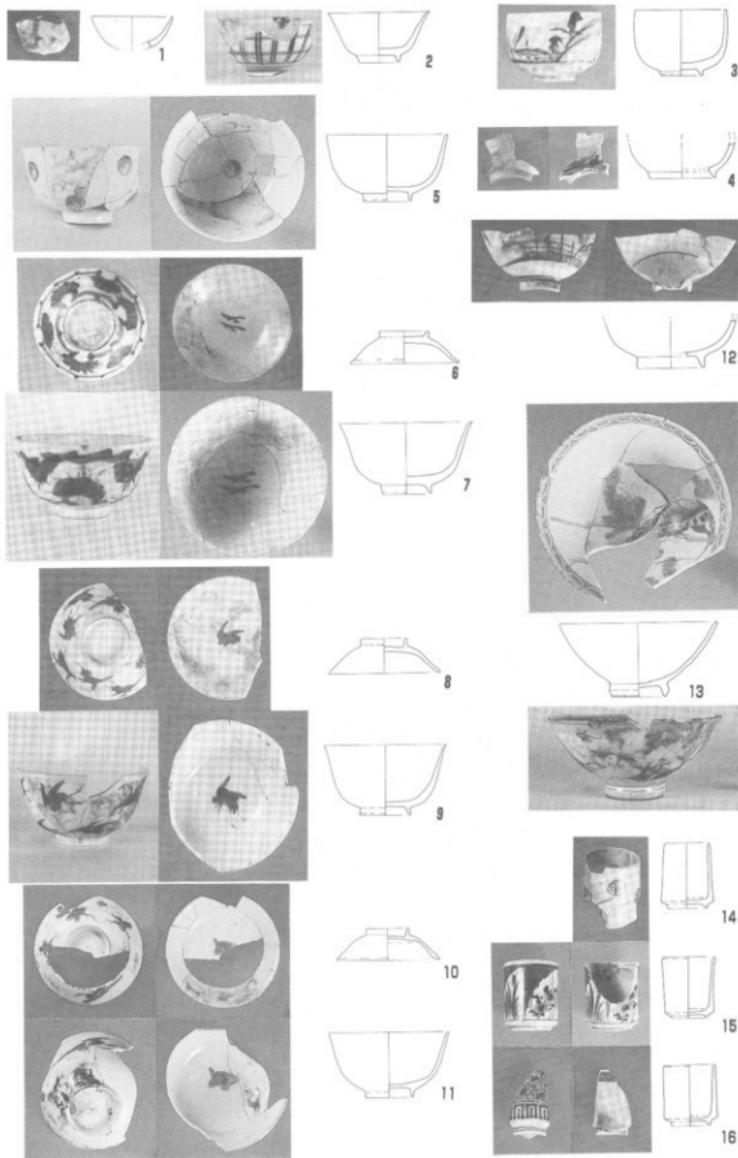


図14 4-S1 出土遺物 (1/4)

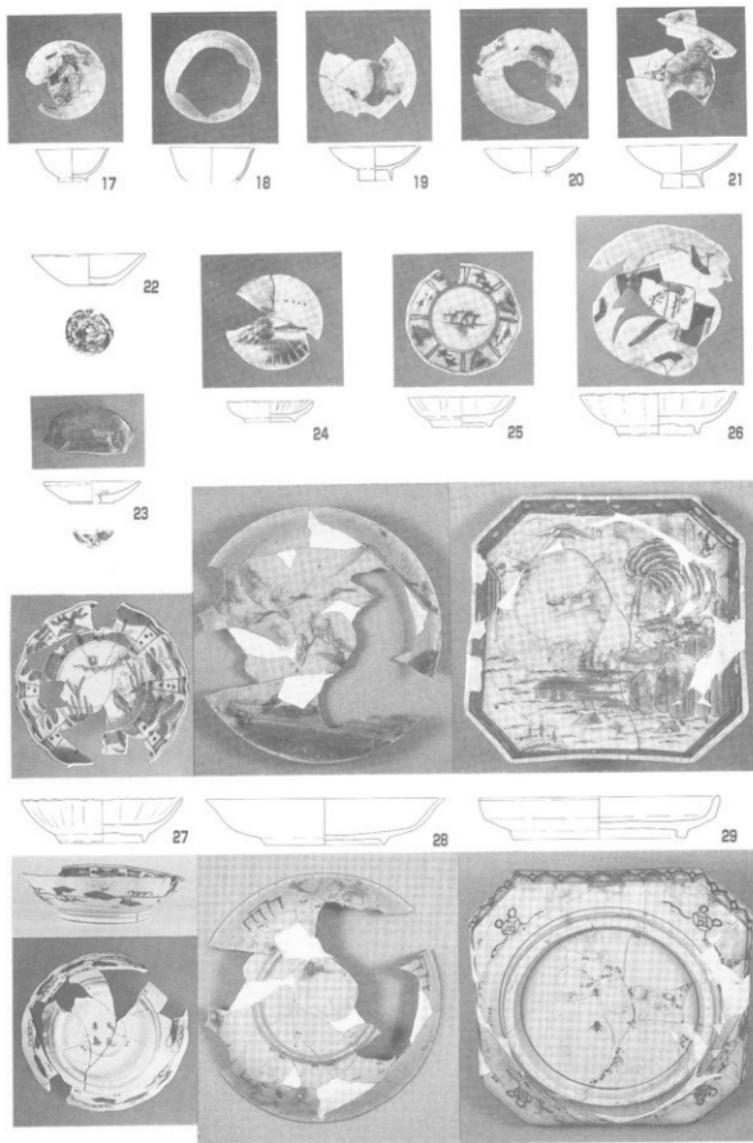
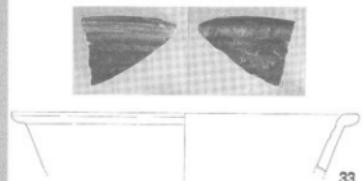
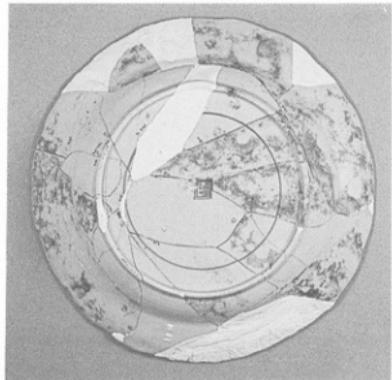
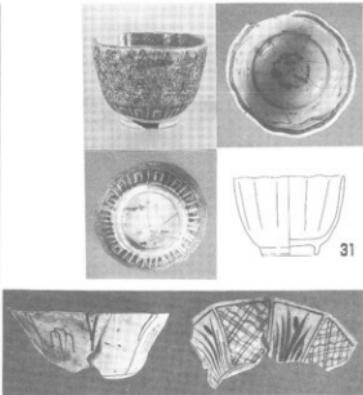
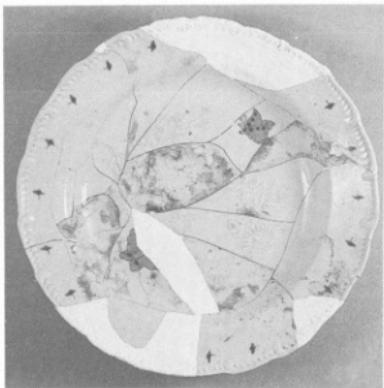
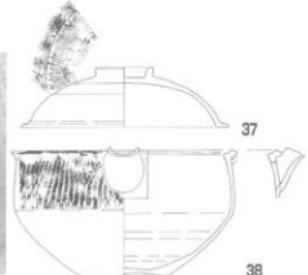


図15 4-S1 出土遺物 (1/4)

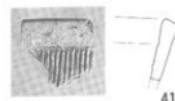
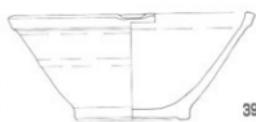
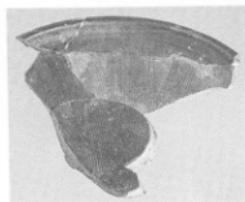


35

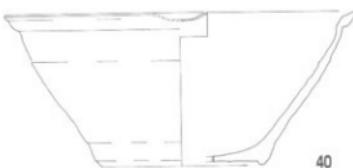
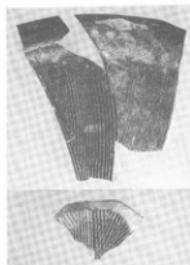


37

図16 4-S1 出土遺物 (1/4)



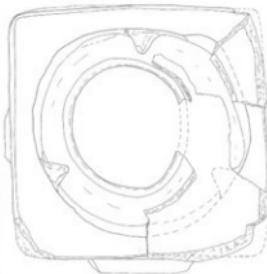
41



40



42

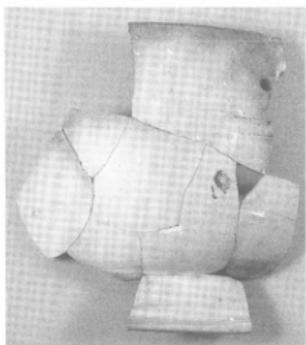


43

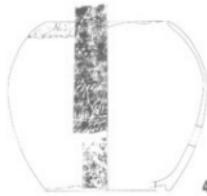
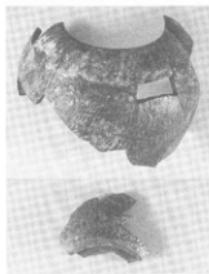


44

図17 4-S1 出土遺物 (1/4)



45



46



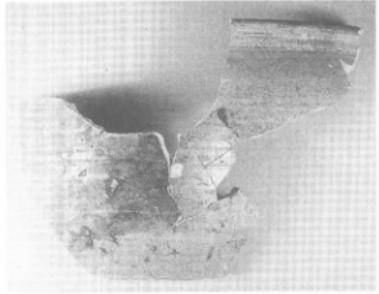
47



48



49



50

図18 4-S1出土遺物 (45:1/4、46~50:1/6)

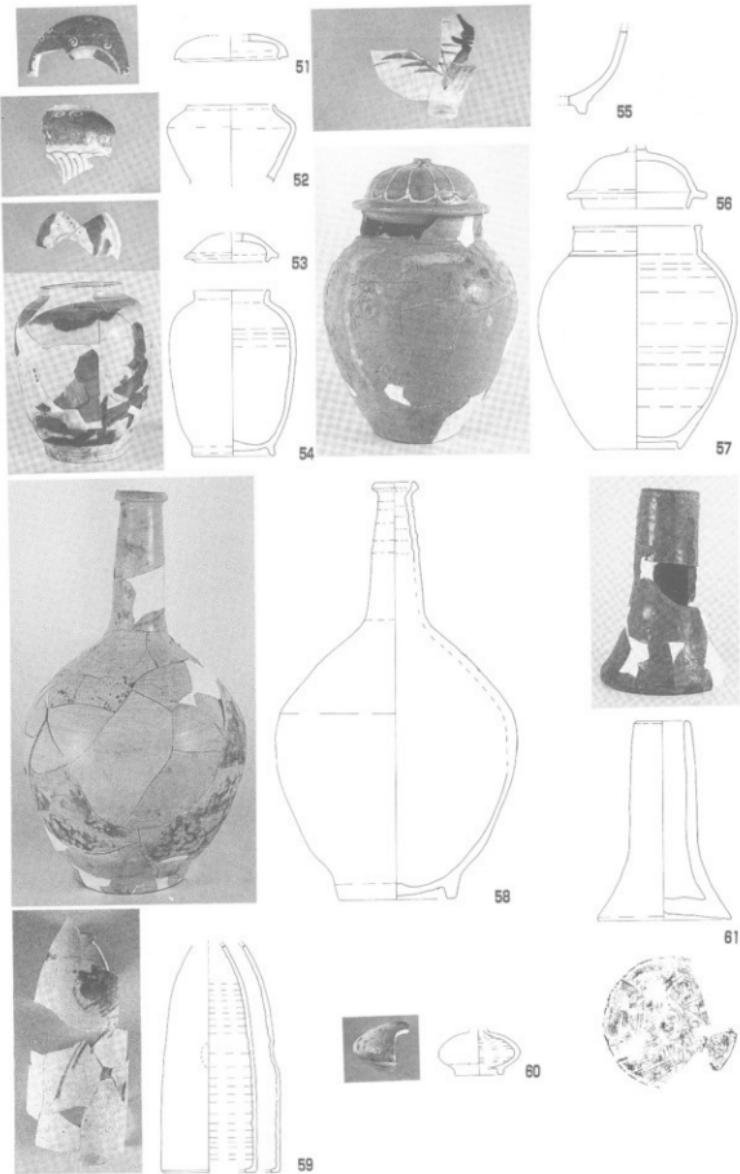
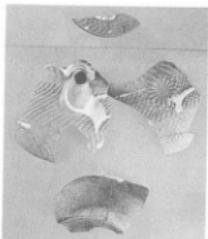


図19 4-S1 出土遺物 (1/4)



62



66



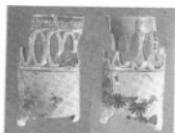
63



64



68



65



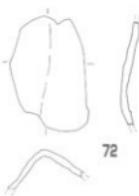
69



70



71



72

図20 4-S1 出土遺物 (1/4)

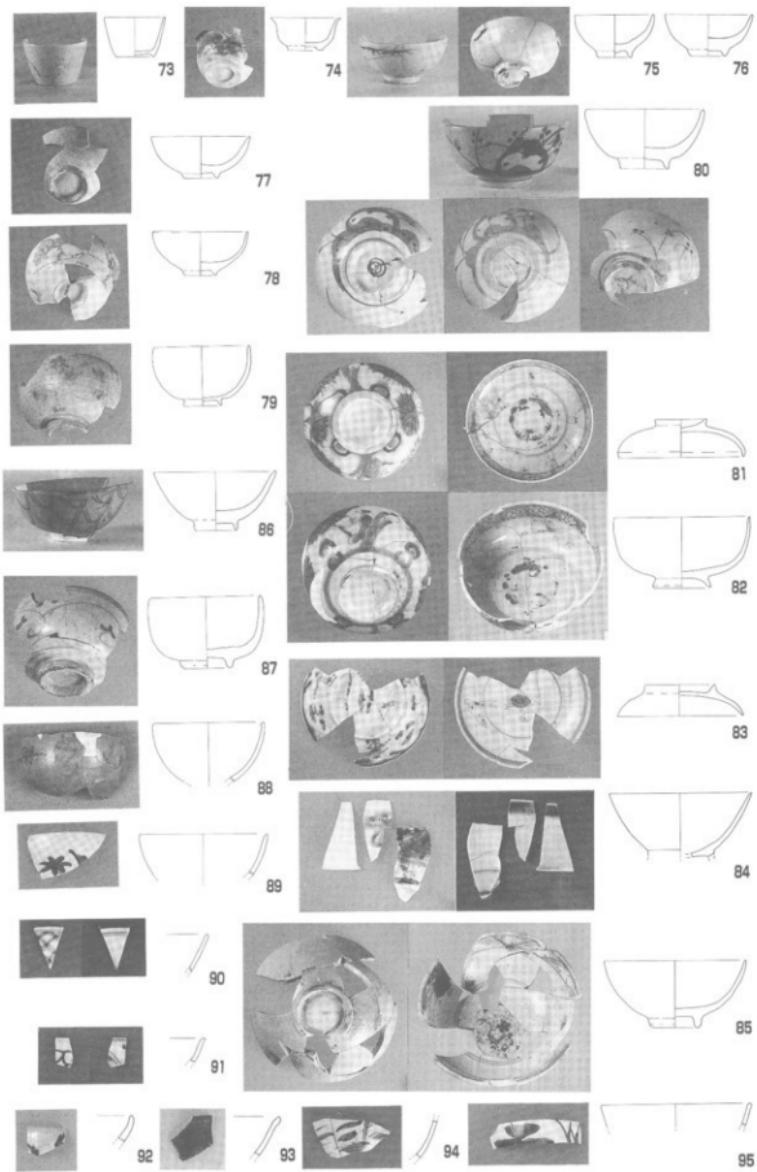


図21 4-S2 出土遺物 (1/4)

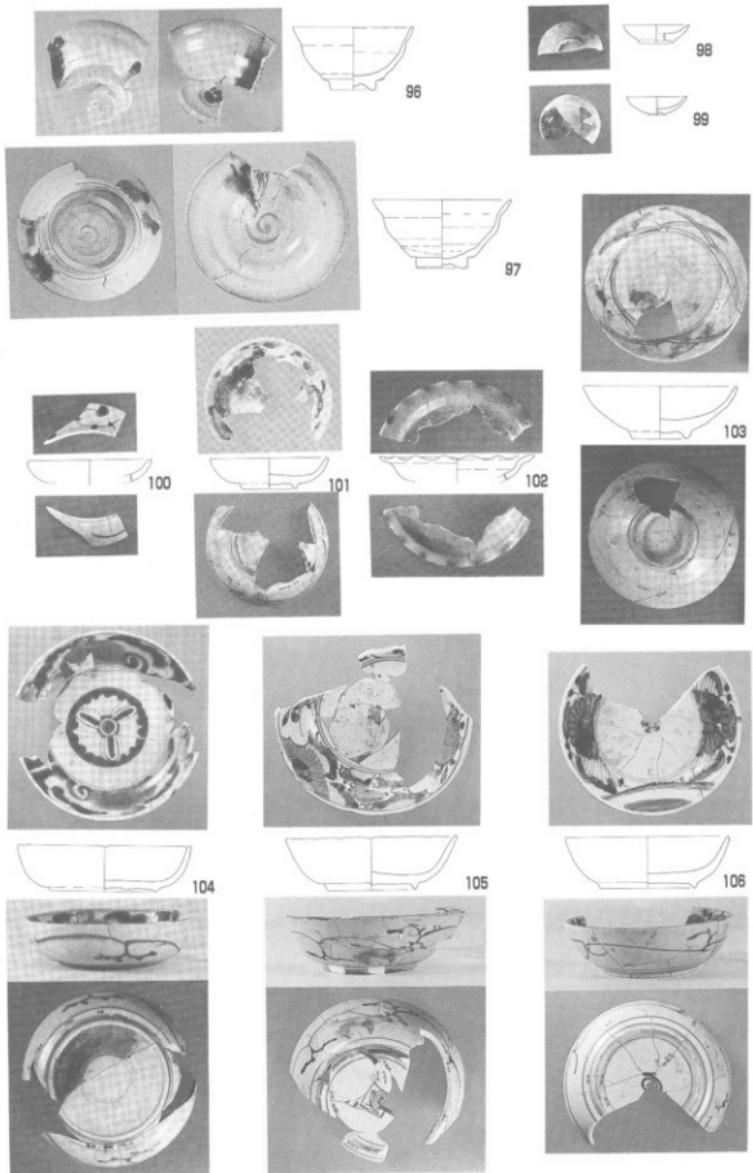


図22 4-S2 出土遺物 (1/4)

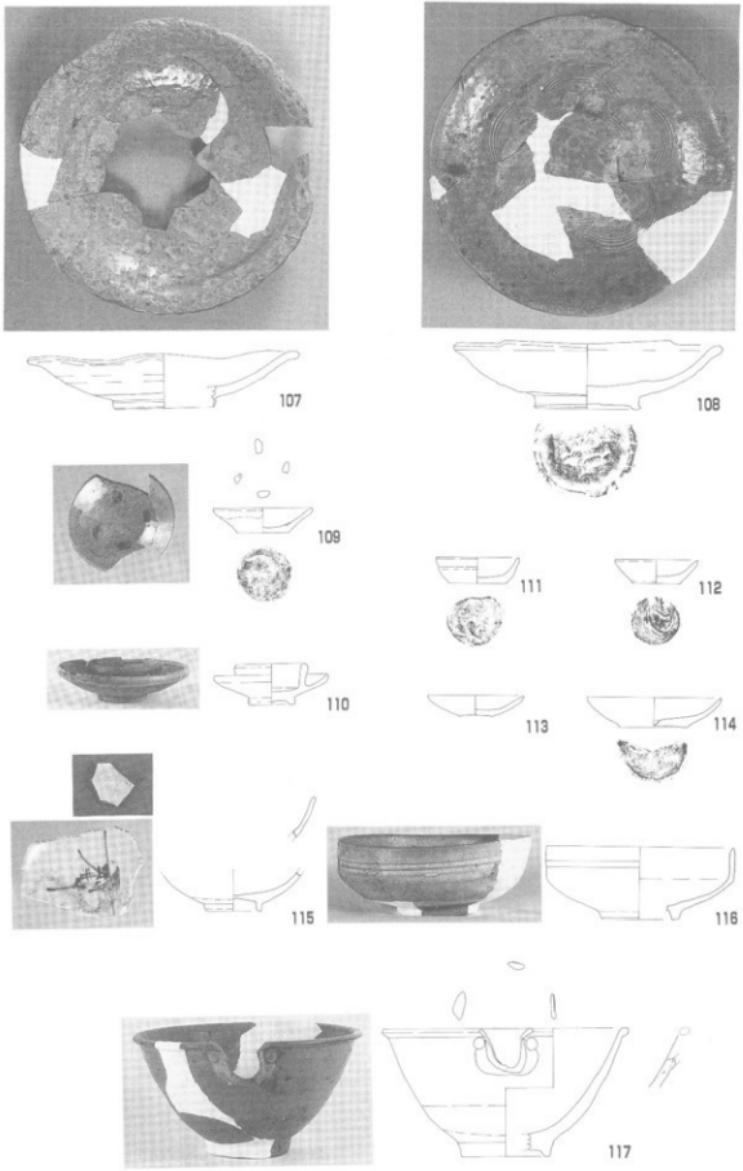
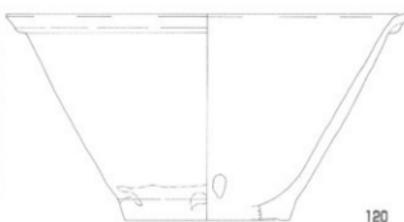
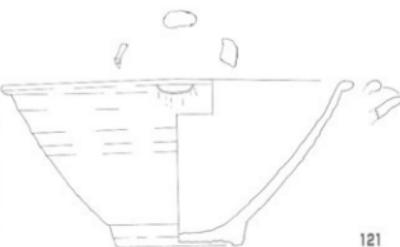


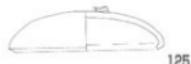
図23 4-S2 出土遺物 (1/4)



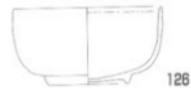
120



121



125



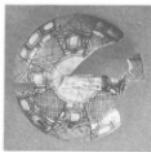
126



122



123



124

図24 4-S2 出土遺物 (1/4)

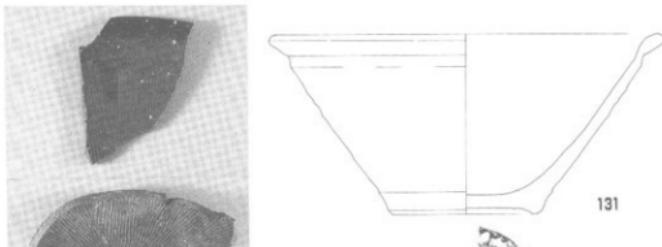
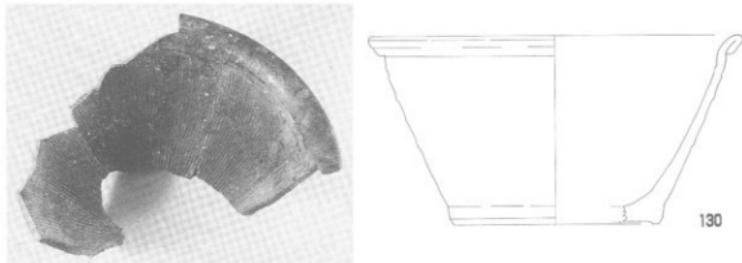
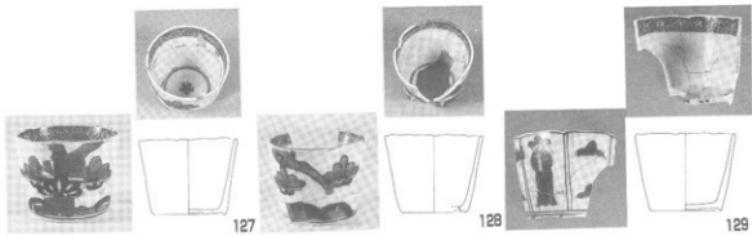


図25 4-S2 出土遺物 (1/4)

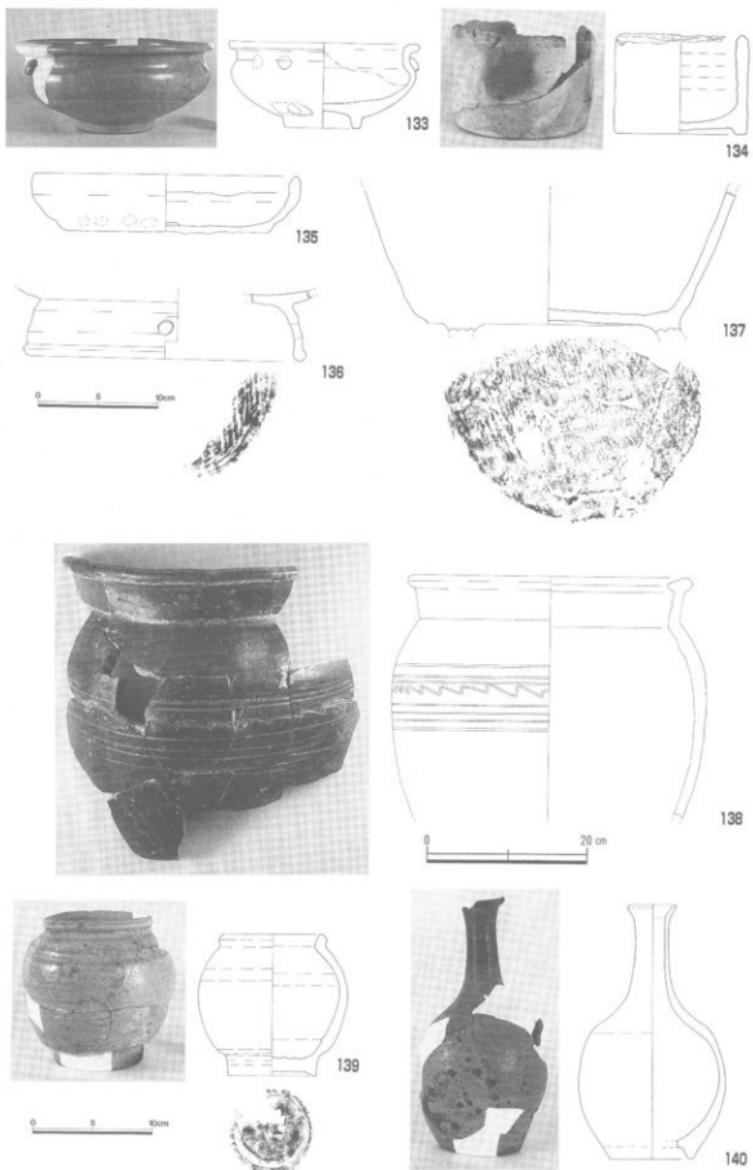


図26 4-S2出土遺物 (133~137・139・140 : 1/4、138 : 1/6)

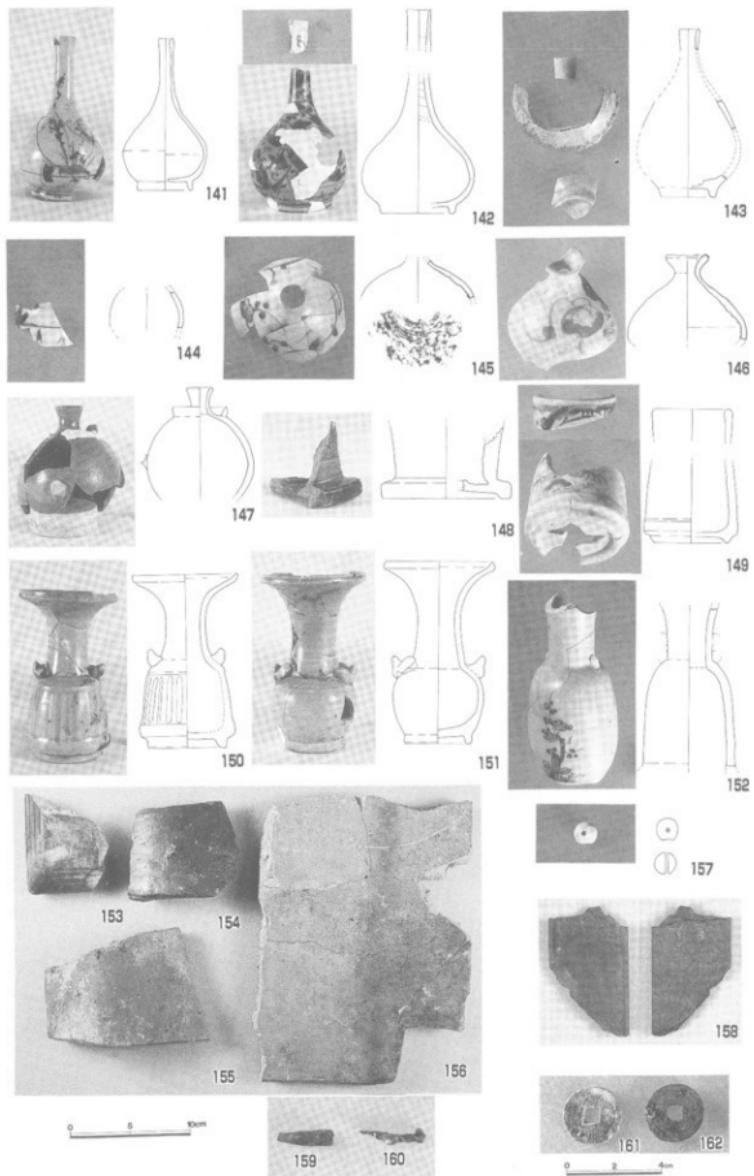


図27 4-S2出土遺物 (141~160:1/4、161·162:1/2)

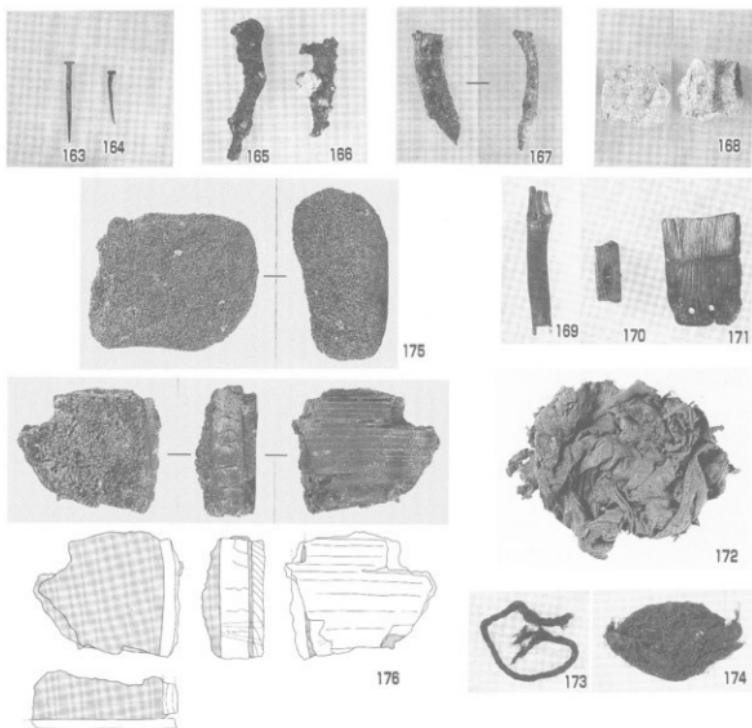


図28 4-S2 出土遺物 (1/4)

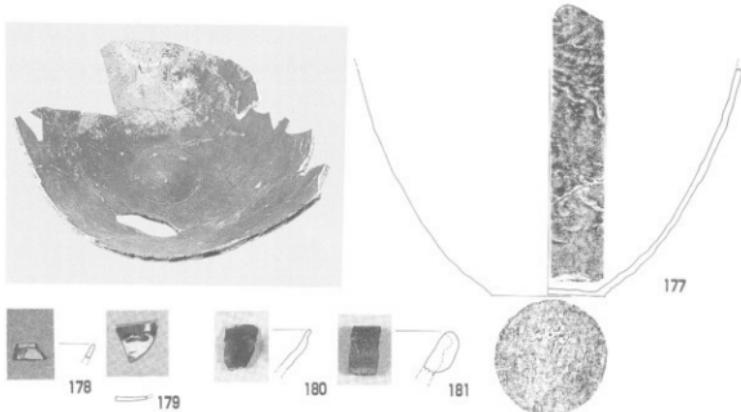
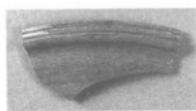
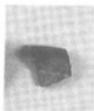


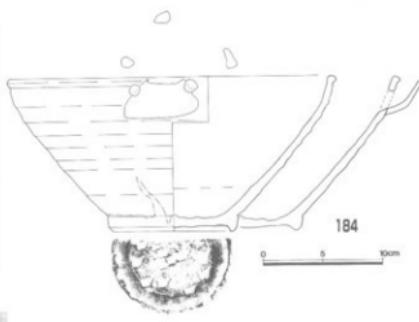
図29 4-S3出土遺物 (177:1/8、178~181:1/4)



182



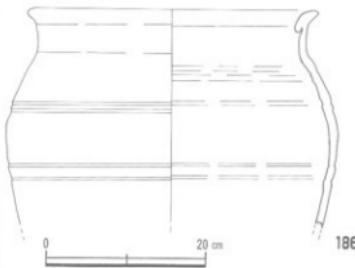
183



184



185



186

図30 5-S4出土遺物 (182~184:1/4、185·186:1/6)

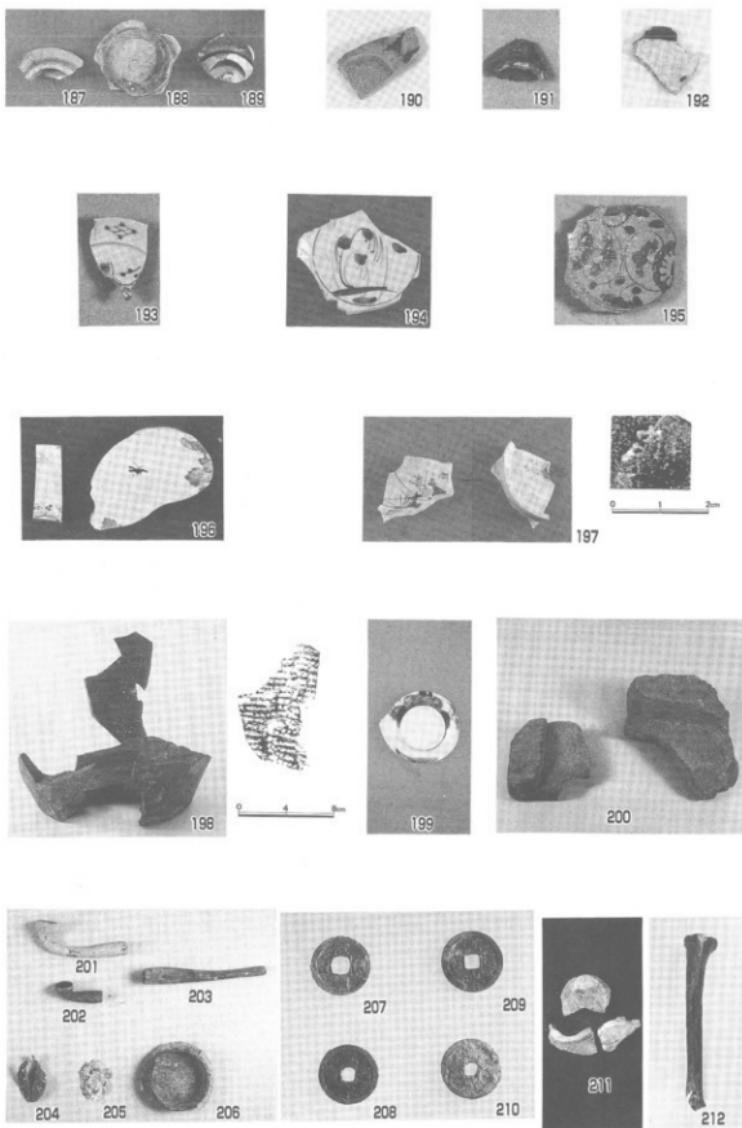


図31 遺構内・包含層出土遺物

表1 出土遺物一覧表(1)

番号	出土場所	器類	器種	始質	釉薬給付	備考	測定値			備考	測定値			
							(A)	(B)	(C)		(A)	(B)	(C)	
14-4-S1	南	碗	小柄	磁器	施付		1	1	1	64-4-S1	盃	中壺	磁器	白色
2-4-S1	南	碗	小柄	磁器	施付	焼成不良	1	5	5	65-4-S1	盃	中壺	磁器	白色
3-4-S1	南	碗	小柄	磁器	施付	焼成不良	1	5	5	66-4-S1	盃	中壺	磁器	灰釉(外)
4-4-S1	南	碗	小柄	磁器	施付	焼成不良	1	2	2	67-4-S1	盃	中壺	磁器	白色釉洗し掛け、見込み目皿3ヵ所
5-4-S1	南	碗	中柄	磁器	施付	焼成不良	1	14	14	57-4-S1	盃	中壺	磁器	化粧刷毛口?、高右内中央ハリええ1ヵ所
6-4-S1	南	碗	中柄	磁器	施付	焼成不良	1	29	6	58-4-S1	盃	中壺	磁器	化粧刷毛口?
7-4-S1	南	碗	中柄	磁器	施付	焼成不良	1	29	6	69-4-S1	盃	中壺	磁器	白
8-4-S1	南	碗	中柄	磁器	施付	焼成不良	1	29	6	70-4-S1	盃	中壺	磁器	白
9-4-S1	南	碗	中柄	磁器	施付	焼成不良	1	10	10	71-4-S1	盃	中壺	磁器	白
10-4-S1	南	盃	中柄	磁器	施付	焼成不良	1	36	7	72-4-S1	盃	中壺	磁器	白
11-4-S1	南	盃	中柄	磁器	施付	焼成不良	1	61	10	73-4-S1	盃	中壺	磁器	白
12-4-S1	南	盃	中柄	磁器	施付	焼成不良	1	2	2	74-4-S1	盃	中壺	磁器	白
13-4-S1	南	盃	中柄	磁器	施付	焼成不良	1	8	8	75-4-S1	盃	中壺	磁器	白
14-4-S1	南	盃	中柄	磁器	施付	焼成不良	1	28	6	76-4-S1	盃	中壺	磁器	白
15-4-S1	南	盃	中柄	磁器	施付	焼成不良	1	8	3	77-4-S1	盃	中壺	磁器	白
16-4-S1	南	盃	中柄	磁器	施付	焼成不良	1	19	3	78-4-S1	盃	中壺	磁器	白
17-4-S1	南	盃	中柄	磁器	施付	焼成不良	1	7	7	79-4-S1	盃	中壺	磁器	白
18-4-S1	南	盃	中柄	磁器	施付	焼成不良	1	10	10	80-4-S1	盃	中壺	磁器	白
19-4-S1	南	盃	中柄	磁器	施付	焼成不良	1	14	14	81-4-S1	盃	中壺	磁器	白
20-4-S1	南	盃	中柄	磁器	施付	焼成不良	1	12	12	82-4-S1	盃	中壺	磁器	白
21-4-S1	南	盃	中柄	磁器	施付	焼成不良	1	8	8	83-4-S1	盃	中壺	磁器	白
22-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	1	1	84-4-S1	盃	中壺	磁器	白
23-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	3	3	85-4-S1	盃	中壺	磁器	白
24-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	2	2	86-4-S1	盃	中壺	磁器	白
25-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	17	9	87-4-S1	盃	中壺	磁器	白
26-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	77	19	88-4-S1	盃	中壺	磁器	白
27-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	126	84	89-4-S1	盃	中壺	磁器	白
28-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	33	33	90-4-S1	盃	中壺	磁器	白
29-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	46	46	91-4-S1	盃	中壺	磁器	白
30-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	28	28	92-4-S1	盃	中壺	磁器	白
31-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	25	25	93-4-S1	盃	中壺	磁器	白
32-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	6	6	94-4-S1	盃	中壺	磁器	白
33-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	1	1	95-4-S1	盃	中壺	磁器	白
34-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	35	7	96-4-S1	盃	中壺	磁器	白
35-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	2	2	97-4-S1	盃	中壺	磁器	白
36-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	21	17	98-4-S1	盃	中壺	磁器	白
37-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	17	17	99-4-S1	盃	中壺	磁器	白
38-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	46	46	100-4-S1	盃	中壺	磁器	白
39-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	16	16	101-4-S1	盃	中壺	磁器	白
40-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	37	37	102-4-S1	盃	中壺	磁器	白
41-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	1	1	103-4-S1	盃	中壺	磁器	白
42-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	5	5	104-4-S1	盃	中壺	磁器	白
43-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	9	9	105-4-S1	盃	中壺	磁器	白
44-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	49	49	106-4-S1	盃	中壺	磁器	白
45-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	30	30	107-4-S1	盃	中壺	磁器	白
46-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	57	57	108-4-S1	盃	中壺	磁器	白
47-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	27	27	109-4-S1	盃	中壺	磁器	白
48-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	39	39	110-4-S1	盃	中壺	磁器	白
49-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	24	24	111-4-S1	盃	中壺	磁器	白
50-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	20	20	112-4-S1	盃	中壺	磁器	白
51-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	7	7	113-4-S1	盃	中壺	磁器	白
52-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	10	10	114-4-S1	盃	中壺	磁器	白
53-4-S1	南	口沿付	中壺	磁器	施付	焼成不良	1	4	4	115-4-S1	盃	中壺	磁器	白

表2 出土遺物一覧表(2)

番号	出土場所	器類	器種	質地	輪縫給付	備考	参考文献	番号	出土場所	器類	器種	質地	輪縫給付	備考	参考文献		
(A)	(B)	(C)	(D)	(E)	(F)	(G)	(H)	(I)	(J)	(K)	(L)	(M)	(N)	(O)	(P)	(Q)	
107.4-S2	風	中柱	陶器	灰釉		高台付近鉄鞋、須佐施。外面レンズ状剥落	1 21 21	160.4-S2	キセル	鋼							
108.4-S2	風	中柱	陶器	灰釉		内面剥落の花文。高台内に工具痕。須佐施	1 13 13	161.4-S2	鋼鐵	鋼							
109.4-S2	風	片口	陶器	灰釉		須佐施	1 8 8	162.4-S2	鋼鐵	鋼							
110.4-S2	風	片口	陶器	灰釉		須佐施	1 9 9	163.4-S2	釘	鐵							
111.4-S2	風	片口	陶器	灰釉		須佐施	1 10 10	164.4-S2	釘	鐵							
112.4-S2	風	片口	陶器	土器			2 6 9	165.4-S2	釘	鐵							
113.4-S2	風	片口	陶器	土器			2 6 9	166.4-S2	釘	鐵							
114.4-S2	風	片口	陶器	土器			2 2 1	167.4-S2	釘	鐵							
115.4-S2	林?	小林?	陶器	灰釉?		サビ施 灰釉?	1 4 4	168.4-S2	壁土	土器							
116.4-S2	林	中柱	陶器	灰釉		サビ施 灰釉?	1 12 12	169.4-S2	木籠竹	木籠竹							
117.4-S2	林	片口	陶器	灰釉		高台内に工具痕。須佐施	1 23 23	170.4-S2	材	木							
118.4-S2	林	片口	陶器	灰釉		須佐施	1 1 1	171.4-S2	材	木							
119.4-S2	林	片口	陶器	灰釉		須佐施	1 1 1	172.4-S2	布	織物							
120.4-S2	林	片口	陶器	灰釉		須佐施	1 33 33	173.4-S2	織物	織物							
121.4-S2	林	片口	陶器	灰釉		高台内に工具痕。須佐施	1 34 34	174.4-S2	織物	織物							
122.4-S2	糞	蓋物蓋	漆器	漆竹			1 2 2	175.4-S2	糞	漆							
123.4-S2	糞	蓋物蓋	漆器	漆竹			1 9 9	176.4-S2	糞	漆							
124.4-S2	糞	蓋物蓋	漆器	漆竹			1 18 18	177.4-S3	糞	漆							
125.4-S2	糞	蓋物蓋	漆器	漆竹			1 15 15	178.4-S3	糞	漆							
126.4-S2	糞	蓋物蓋	漆器	漆竹			1 37 37	179.4-S3	糞	漆							
127.4-S2	糞	蓋物蓋	漆器	漆竹			1 26 26	180.4-S3	糞	漆							
128.4-S2	糞	蓋物蓋	漆器	漆竹			1 26 26	181.4-S3	糞	漆							
129.4-S2	糞	蓋物蓋	漆器	漆竹			1 11 11	182.4-S4	糞	漆							
130.4-S2	糞	蓋物蓋	漆器	漆竹			1 6 6	183.4-S4	糞	漆							
131.4-S2	糞	蓋物蓋	漆器	漆竹			1 5 5	184.4-S4	糞	漆							
132.4-S2	糞	蓋物蓋	漆器	漆竹			1 3 3	185.4-S4	糞	漆							
133.4-S2	糞	蓋物蓋	漆器	漆竹			1 34 34	186.4-S4	糞	漆							
134.4-S2	糞	火入	土器	土器			1 7 7	187.3-S5?	糞	漆							
135.4-S2	糞	火入	土器	土器			1 9 9	188.3-S5?	糞	漆							
136.4-S2	糞	火入	土器	土器			1 4 4	189.5-S22	糞	漆							
137.4-S2	糞	火入	土器	土器		三足筋肋あり	1 18 18	190.6-K	糞	漆							
138.4-S2	糞	火入	土器	土器		内面擦痕タタキ痕	1 59 59	191.3-S2	糞	漆							
139.4-S2	糞	火入	土器	土器		高台内に工具痕。須佐施?	1 20 20	192.6-K	糞	漆							
140.4-S2	糞	火入	土器	土器		高台内に工具痕。須佐施?	1 16 16	193.3-S4	糞	漆							
141.4-S2	糞	火入	土器	土器		高台内に工具痕。須佐施?	1 36 36	194.3-S4	糞	漆							
142.4-S2	糞	火入	土器	土器		高台内に工具痕。須佐施?	1 23 23	195.4-S4	糞	漆							
143.4-S2	糞	火入	土器	土器		高台内に工具痕。須佐施?	1 6 6	196.5-S17	糞	漆							
144.4-S2	糞	火入	土器	土器		高台内に工具痕。須佐施?	1 6 6	197.26.4施土	糞?	漆							
145.4-S2	糞	火入	土器	土器		内面レンズ状の小剥離痕多い	1 10 10	198.5-S14	陶器	色繪							
146.4-S2	糞	火入	土器	土器			1 3 3	199.6-S	陶器	色繪							
147.4-S2	糞	火入	土器	土器		須佐施	1 9 9	200.4X2施土	陶器	色繪							
148.4-S2	糞	火入	土器	土器		須佐施	1 1 1	201.5区3施土	陶器	色繪							
149.4-S2	糞	火入	土器	土器		須佐施	1 5 5	202.4X2施土	陶器	色繪							
150.4-S2	糞	火入	土器	土器		須佐施	1 12 12	203.5区2施土中	陶器	色繪							
161.4-S2	糞	火入	土器	土器		須佐施	3 47 47	204.5区2施土	陶器	色繪							
152.4-S2	糞	火入	土器	土器		須佐施	1 12 12	205.5区3施土	陶器	色繪							
153.4-S2	瓦	瓦	瓦	瓦		いぶし瓦。各辺に沈線4本。		206.5区4施土	陶器	色繪							
154.4-S2	瓦	瓦	瓦	瓦		未特種?		207.5-S17	陶器	色繪							
155.4-S2	瓦	瓦	瓦	瓦		筋縫?		208.5X2施土	陶器	色繪							
156.4-S2	瓦	瓦	瓦	瓦		筋縫?		209.4X1施土	陶器	色繪							
157.4-S2	瓦	瓦	瓦	瓦		筋縫め		210.5X4施土	陶器	色繪							
158.4-S2	瓦	瓦	瓦	瓦		裏面に薬剤「金・油墨」		211.4X3施土上	陶器	色繪							
159.4-S2	セセル	鏡	鏡	鏡				212.5-S5	鏡	鏡							

IV.まとめ

これまで文献や伝承などで知られていた江戸時代の大火灾の跡が、現在も町並みの下に埋まっていることが明らかとなった。しかも、遺存状況良好な部分では、焼土層6枚の層位的な堆積状況が確認でき、その焼土層下面の多くには遺構が残されていることも分かった。このことは、今回のような小規模な調査であっても、層位的な発掘をおこなうことで記録に残されていない江戸時代の町並みの詳細な変遷を追うことができることを意味している。また、遺構内から出土した一括資料は、一回の火災によって廃棄された一時期の生活品のセットであり、当時津和野城下で流通し使用されていた具体的な生活品を知ることが可能となる。

今回の調査対象地は、城下町北端のかつて町屋があったところである。遺構の前後関係が比較的つかみやすかった3・5区についてみると、火災の前後でもほぼ同じ屋敷割りが継続することが多かった事が分かる。具体的には、3区基礎石列（3-S7・S8・S10・S11・S12・S15）、5区北端の基礎石列（5-S26・S27）、5区南端のタタキ面（5-S21・S22・S23）があげられる。これらの遺構と城下絵図に描かれた屋敷との対比は、調査面積が狭いこともあり困難であった。その中で、4-S2出土遺物には「金 柏屋」と線刻された硯（図27-158）がある。4-S2とは時期が異なるものの、「柏屋」という屋号は元禄期絵図の調査対象地付近（図4、●印）にあり、考古資料と文献史料を結ぶ数少ない資料として注目される。特徴的な遺構としては、穀物を保管していた半地下式の穴蔵（4-S2）、小便専用の便槽と推定される理窓（4-S3）などが検出された。

今回の調査では擾乱が激しく遺構面も接近していることから、各遺構・包含層の厳密な時期特定は困難であり、概ねの時期的傾向を把握するのみとした。焼土を伴う上層では17～19C代の遺物が出土し、焼土を伴わない下層では15～16C代の遺物が主に出土している。遺構内遺物の中で、4-S1と4-S2出土遺物は種類も豊富で、層位的に前後関係のつかめる非常に良好な一括資料であった。このうち、磁器の大部分は肥前系、陶器は須佐焼（山口県須佐町）および在地系の石見焼が大半を占めているようである。地理的に近い須佐焼についてみると、捕鉢、こね鉢、片口、中皿など比較的大型のものが主に出土しており、小型のものは灯明皿、灯明皿台が出土している。小型品のうち、碗類・鉢類については須佐焼が出土しておらず、代わりに磁器が補完している傾向がみられる。

4-S1・S2出土品の中にはいずれも、安政元年（1854）頃開窯し、後に津和野藩御用窯となった喜阿弥焼（現在の島根県益田市）、および安政5年（1858）開窯し、後に津和野藩から資金を貸し付けられた自上焼（現在の島根県益田市）に類するものが出土していないことから、これらの開窯以前であると言える。4-S1出土品には、コンニャク印判を用いた五弁花文や湯福銘がすでに見られないこと、1820年代以降に位置付けられている端反碗が碗の主体であることなどから19C第2四半期の資料であると考えられる。このことは、4-S1出土の図16-37・38が益田市相生遺跡の物原出土の行平と同様のものであり、相生遺跡窯跡の操業の下限が天保年間（1830～1843）あたりになると考えられていることと矛盾しない。4-S2出土品には、コンニャク印判を用いた五弁花文や青磁染付碗（図21-85）など18C代の特徴を持つものがある。そのほか、高台部を欠損しているため断定はできないものの、図21-83・84が1780年代に現れるとされる広東碗であるとすれば、4-S2は18C第4四半期の資料である可能性が高いと考えられる。

江戸時代の大火灾についてまとめた研究成果を参考にすると、発掘調査地点が火災に見舞われた可能性のある年代としては、嘉永6（1853）、享和元（1801）、安永2（1773）、宝暦13（1763）、宝永2（1705）、

元禄11（1698）、寛永7（1630）年が挙げられる。また、近現代にこの場所で火災があったということは伝えられていない。このうち、寛永7（1630）年の火災については、後述するように現在のところ出土遺物の裏付けに乏しい。4-S1、4-S2の時期を比定すると、4区第1焼土下面で検出した4-S1は嘉永6（1853）年、4区第2焼土下面で検出した4-S2は享和元（1801）年に該当する可能性が高い。これを基準にして、層位的な上下関係から他の遺構面・焼土の概ねの時期を求めるすれば、4区3層下面是嘉永6（1853）年以降、4区10層タキ面及び4区第3焼土は18C後半、4区第4焼土および4区18層は17C中葉～18C前半に相当している可能性がある。

他の調査区については、良好な一括資料が少なく詳細な時期比定は困難であるが、4区との概ねの対応関係から3区第4焼土及び5区第4・5焼土が17C中葉～18C前半、3区第3焼土以上及び5区第3焼土以上が18C後半～19C中葉に相当している可能性があると大きく捉えておきたい。6区については擾乱が著しく、他の調査区との対応関係は不明な点が多い。これらの時期比定については、文献に記された火災が実際にこの場所に及んでいたのかという問題も含めて、今後の発掘調査の積み重ねを通じて検証していく必要があることは言うまでもない。

ところで、今回の調査では17C前葉の遺物が志野（図31-192）以外ほとんど見当たらず、他には試掘1・2区で唐津焼の皿が出土した程度であるということには注意しておく必要がある。調査面積が狭いこと、及び3区下層がトレンチ調査に留まってしまっていることも考慮しなければならないが、この場所で本格的な城下町建設が始まるのは17C中葉以降であり、中世からの集落とは一時期断絶があった可能性もある。その一方、下層出土遺物の中には貿易陶磁器（図31-187～191）など、明らかに江戸時代より前に遡る資料が含まれている。このことは、坂崎氏入封による本格的な城下町建設以前に既に人々が居住していたことを意味しており、本町北端から祇園町がかつて下市と呼ばれた中世の市場集落であったと考えられていることと符合する。

16C以前の集落を考える上で興味深いのが、遺構の主軸の問題である（図5）。3・4区についてみると、17C中葉以降である第4焼土以下の遺構面では、N3°～13°Eにおさまり、いずれも座標北より東に主軸を振っている。この主軸は、調査地東側の祇園町通りと並行するものではなく、南側の風呂屋町通りとも直交するものではなく、その中間の角度に相当している。一方、16C後半と考えられる4-S3の主軸はN8°W、同様の時期と推定される3-S6もやや西に主軸を振っている可能性があり、いずれも座標北より西に主軸を振っている。この主軸は、祇園町通りにほぼ並行するものの、風呂屋町通りには直交方向とならない。遺構の主軸と道路軸が関連し合うとすれば、16C代には祇園町通りしか存在しておらず、その道路軸に影響を受ける形で遺構の主軸が決定されたのではないかと考えられよう。その後、遺構の主軸が変化することは、17C代以降城下町建設の進展とともに新たに風呂屋町通りができたことを示している可能性があり、その結果、祇園町通り・風呂屋町通りという2本の道路軸の影響を受ける形で遺構の主軸が決定されはじめた可能性があるのではないかと考えられる。さらに、厳密に4-S3の主軸を検討すると、祇園町通りの主軸N2°Wよりもさらに主軸を西に振っていることが分かる。遺構の主軸と道路の関係が極めて密接なものであるとするならば、16C代の道路は17C代以降の祇園町通りとは異なっていたと考えることもできる。このことは、祇園町南東に設けられた城下町特有の“喰違い”的成立前後の状況を考える上で興味深いことであり、今後は近世城下町の母体となつたと想定される中世の道を確認していく必要があるだろう。

5・6区の主軸についてみると、5区では第4・5焼土下面でN27°Eであったものが、第2・3焼

土下面ではN 6° Eとなっている。6区では第3焼土・10層下面でN29° Eであったものが、第2焼土下面ではN13° Eとなっている。5・6区の場所は、不整四角形をした町割りの鋭角の部分に相当しており、南側の風呂屋町通りを基準とした屋敷割りをすればN27~29° E前後の主軸となり、東側の祇園町通りを基準とすればN 6~13° E前後の主軸となるためではないかと考えられる。先述したように屋敷割りは火災の前後でも継続されることが多いが、これらの例では火災を契機に屋敷割りに大きな変化があったことを示している。今後、このような調査を積み重ねていくことで、津和野城下町の具体的な町並みの変遷を明らかにできるものと考えられる。

引用·参考文献

- 沖本常吉編『津和野町史』第1~3巻 1970~1989
 - 森澄泰文「後日田物語」上納紙制度と紙漉衰話—義民 仁右衛門父子物語一津和野ものたり7 1976
 - 村上勇嗣『島根の芸』島根県立博物館 1987
 - 原宏編『日本やきもの集成』8山陰 1981
 - 平田正典『石見陶器研究史』1979
 - 鳥取県教育委員会『鳥取県生産遺跡分布調査報告書』窯業関係遺跡 1985
 - 川本町教育委員会『邑智郡川本町 谷戸経塙・木谷石塔発掘調査報告書』 1987
 - 島根県教育委員会『足見空港建設予定地内遺跡 墓藏文化財発掘調査報告書』 1992
 - 山口県教育委員会『生産遺跡分布調査報告書 窯業』山口県埋蔵文化財調査報告書第74集 1983
 - 須佐町教育委員会『須佐唐津窯』 1971
 - 山口県教育委員会『須佐唐津窯』山口県埋蔵文化財調査報告書第71集 1983
 - 山口県教育委員会『須佐占塙』山口県埋蔵文化財調査報告書 1990
 - 大橋康二・西田宏子監修『別冊太陽 古伊万里』 1988
 - 大橋康二『肥前陶器』考古学ライブラリー55 1993
 - 江戸陶磁器研究グループ『シンボルム江戸出土陶磁器・土器の諸問題I』 1992
 - 江戸陶磁器研究グループ『シンボルム江戸出土陶磁器・土器の諸問題II』 1996
 - 新宿区内藤町調査会『東京都新宿区内藤町放題一放題5号線整備事業に伴う緊急免掘調査報告書』 1992
 - 宇野伸夫『食器文化の意義と方法』『立歴日本民俗博物館研究報告』第40集 1992

年次		日時		刻		風向		出		火		類似被害	
明治	(1)(2)(3)	水木	11(11)6 午後二時	未	未	東	東	未	未	未	未	未	未
三	元治一(1)(2)	元治一	11(12)1 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
四	元治二(1)(2)	元治二	11(12)2 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
五	明治一(1)(2)	明治一	11(12)3 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
六	明治二(1)(2)	明治二	11(12)4 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
七	明治三(1)(2)	明治三	11(12)5 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
八	明治四(1)(2)	明治四	11(12)6 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
九	明治五(1)(2)	明治五	11(12)7 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
十	明治六(1)(2)	明治六	11(12)8 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
十一	明治七(1)(2)	明治七	11(12)9 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
十二	明治八(1)(2)	明治八	11(12)10 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
十三	明治九(1)(2)	明治九	11(12)11 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
十四	明治十(1)(2)	明治十	11(12)12 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
十五	明治十一(1)(2)	明治十一	11(12)13 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
十六	明治十二(1)(2)	明治十二	11(12)14 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
十七	明治十三(1)(2)	明治十三	11(12)15 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
十八	明治十四(1)(2)	明治十四	11(12)16 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
十九	明治十五(1)(2)	明治十五	11(12)17 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
二十	明治十六(1)(2)	明治十六	11(12)18 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
廿一	明治十七(1)(2)	明治十七	11(12)19 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
廿二	明治十八(1)(2)	明治十八	11(12)20 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
廿三	明治十九(1)(2)	明治十九	11(12)21 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
廿四	明治二十(1)(2)	明治二十	11(12)22 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
廿五	明治廿一(1)(2)	明治廿一	11(12)23 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
廿六	明治廿二(1)(2)	明治廿二	11(12)24 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
廿七	明治廿三(1)(2)	明治廿三	11(12)25 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
廿八	明治廿四(1)(2)	明治廿四	11(12)26 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
廿九	明治廿五(1)(2)	明治廿五	11(12)27 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
三十	明治廿六(1)(2)	明治廿六	11(12)28 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
卅一	明治廿七(1)(2)	明治廿七	11(12)29 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
卅二	明治廿八(1)(2)	明治廿八	11(12)30 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
卅三	明治廿九(1)(2)	明治廿九	11(12)31 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
卅四	明治三十(1)(2)	明治三十	11(12)1 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
卅五	明治卅一(1)(2)	明治卅一	11(12)2 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
卅六	明治卅二(1)(2)	明治卅二	11(12)3 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
卅七	明治卅三(1)(2)	明治卅三	11(12)4 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
卅八	明治卅四(1)(2)	明治卅四	11(12)5 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
卅九	明治卅五(1)(2)	明治卅五	11(12)6 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
四十	明治卅六(1)(2)	明治卅六	11(12)7 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
四一	明治卅七(1)(2)	明治卅七	11(12)8 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
四二	明治卅八(1)(2)	明治卅八	11(12)9 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
四三	明治卅九(1)(2)	明治卅九	11(12)10 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
四四	明治四十(1)(2)	明治四十	11(12)11 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
四五	明治四一(1)(2)	明治四一	11(12)12 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
四六	明治四二(1)(2)	明治四二	11(12)13 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
四七	明治四三(1)(2)	明治四三	11(12)14 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
四八	明治四四(1)(2)	明治四四	11(12)15 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
四九	明治四五(1)(2)	明治四五	11(12)16 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
五十	明治四六(1)(2)	明治四六	11(12)17 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
五十一	明治四七(1)(2)	明治四七	11(12)18 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
五十二	明治四八(1)(2)	明治四八	11(12)19 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
五十三	明治四九(1)(2)	明治四九	11(12)20 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
五十四	明治五〇(1)(2)	明治五〇	11(12)21 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
五十五	明治五一(1)(2)	明治五一	11(12)22 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
五十六	明治五二(1)(2)	明治五二	11(12)23 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
五十七	明治五三(1)(2)	明治五三	11(12)24 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
五十八	明治五四(1)(2)	明治五四	11(12)25 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
五十九	明治五五(1)(2)	明治五五	11(12)26 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
六十	明治五六(1)(2)	明治五六	11(12)27 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
六十一	明治五七(1)(2)	明治五七	11(12)28 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
六十二	明治五八(1)(2)	明治五八	11(12)29 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
六十三	明治五九(1)(2)	明治五九	11(12)30 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
六十四	明治六十(1)(2)	明治六十	11(12)1 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
六十五	明治六一(1)(2)	明治六一	11(12)2 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
六十六	明治六二(1)(2)	明治六二	11(12)3 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
六十七	明治六三(1)(2)	明治六三	11(12)4 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
六十八	明治六四(1)(2)	明治六四	11(12)5 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
六十九	明治六五(1)(2)	明治六五	11(12)6 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
七十	明治六六(1)(2)	明治六六	11(12)7 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
七十一	明治六七(1)(2)	明治六七	11(12)8 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
七十二	明治六八(1)(2)	明治六八	11(12)9 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
七十三	明治六九(1)(2)	明治六九	11(12)10 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
七十四	明治七〇(1)(2)	明治七〇	11(12)11 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
七十五	明治七一(1)(2)	明治七一	11(12)12 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
七十六	明治七二(1)(2)	明治七二	11(12)13 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
七十七	明治七三(1)(2)	明治七三	11(12)14 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
七十八	明治七四(1)(2)	明治七四	11(12)15 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
七十九	明治七五(1)(2)	明治七五	11(12)16 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
八十	明治七六(1)(2)	明治七六	11(12)17 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
八十一	明治七七(1)(2)	明治七七	11(12)18 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
八十二	明治七八(1)(2)	明治七八	11(12)19 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
八十三	明治七九(1)(2)	明治七九	11(12)20 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
八十四	明治八〇(1)(2)	明治八〇	11(12)21 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
八十五	明治八一(1)(2)	明治八一	11(12)22 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
八十六	明治八二(1)(2)	明治八二	11(12)23 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
八十七	明治八三(1)(2)	明治八三	11(12)24 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
八十八	明治八四(1)(2)	明治八四	11(12)25 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
八十九	明治八五(1)(2)	明治八五	11(12)26 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
九〇	明治八六(1)(2)	明治八六	11(12)27 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
九一	明治八七(1)(2)	明治八七	11(12)28 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
九二	明治八八(1)(2)	明治八八	11(12)29 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
九三	明治八九(1)(2)	明治八九	11(12)30 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
九四	明治九〇(1)(2)	明治九〇	11(12)1 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
九五	明治九一(1)(2)	明治九一	11(12)2 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
九六	明治九二(1)(2)	明治九二	11(12)3 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
九七	明治九三(1)(2)	明治九三	11(12)4 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
九八	明治九四(1)(2)	明治九四	11(12)5 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
九九	明治九五(1)(2)	明治九五	11(12)6 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
一〇〇	明治九六(1)(2)	明治九六	11(12)7 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
一〇一	明治九七(1)(2)	明治九七	11(12)8 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
一〇二	明治九八(1)(2)	明治九八	11(12)9 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
一〇三	明治九九(1)(2)	明治九九	11(12)10 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
一〇四	明治一〇〇(1)(2)	明治一〇〇	11(12)11 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
一〇五	明治一〇一(1)(2)	明治一〇一	11(12)12 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
一〇六	明治一〇二(1)(2)	明治一〇二	11(12)13 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
一〇七	明治一〇三(1)(2)	明治一〇三	11(12)14 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未	未	未
一〇八	明治一〇四(1)(2)	明治一〇四	11(12)15 午前六時	未	未	北	北	未	未	未	未		

表3 津和野城下火災略年表(文献2)

環境考古研究会 金原正明・金原正子

1.はじめに

トイレ遺構等の糞便の堆積物は、寄生虫卵密度、花粉群集組成、種実群集組成において、特異性を示し、他の堆積物と識別することができ、トイレ遺構を識別することができる。また、その遺体群集から、今まで以上に直接的に食べた食物を探ることができます。祇園町遺跡では火災跡から検出された埋桶、埋甕の堆積物の寄生虫卵分析、花粉分析、種実同定からトイレ遺構の検討を行い、火災による炭化種実および炭化材の樹種を行う。

2. 試料

試料は、近世の火災跡の2-S1（埋桶）の16層、17層、18層中央、18層東端、18層西端、3-S5（湿地？）の23層、4-S3（埋甕）の埋土上、埋土下の8点を寄生虫卵分析と花粉分析を行い、4点の種実同定を行った。

炭化種実、炭化材、炭化物は計31点を対象とした。炭化材は炭化種実と付着しており7点あった。

3. 寄生虫卵分析

（1）方法

寄生虫卵の分離抽出は、寄生虫卵に以下の物理化学処理を加えて行った。

- 1) 堆積物（試料）1ccを採量し、脱イオン水を加え攪拌する。
 - 2) 篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す。
 - 3) 25%フッ化水素酸を加え、2・3度混和しつつ、30分間静置する。
 - 4) 遠心分離器によって水洗後、残渣を2分する。
 - 5) 片方にアセトリシス処理を施す。
 - 6) 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入し、それぞれ標本を作製する。
 - 7) 生物顕微鏡下で直線視野法によって検鏡・計数を行う。
- 以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨ててという操作を3回繰り返して行った。

（2）結果

1) 2-S1（埋桶）

寄生虫卵は16、17層ではやや低密度であったが、18層では比較的高い密度で検出された。最も寄生虫卵密度の高い18層西端では試料1cc中に1000個以上の密度で検出された。回虫卵が最も多く、鞭虫卵、異形吸虫卵がやや多い。他に肝吸虫卵、日本海製頭条虫卵、マンソン製頭条虫卵が検出された。

2) 3-S5（湿地？）の23層

やや低密度で200個程度が検出された。回虫卵、鞭虫卵、異形吸虫卵が検出された。

3) 4-S3（埋甕）

埋土上、埋土下とも寄生虫卵は検出されなかった。

4. 花粉分析

(1) 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。

2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。

3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。

4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトトリス処理(無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。

5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。

6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学的各処理間の水洗は、遠心分離1500rpm、2分間の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、形態的特徴および所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(ー)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村(1974、1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

(2) 結果

1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉14、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉23、シダ植物胞子2形態の計41である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、カバノキ属、クマシデ属ーアサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、サンショウ属、ブドウ属、ツタ、ツツジ科、ニワトコ属ーガマズミ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科ーイラクサ科、マメ科

〔草本花粉〕

ガマ属ーミクリ属、サジオモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科ーヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、ワレモコウ属、アリノトウグサ属ーフサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、オオバコ属、オミナエシ科、タンボボ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属、ベニバナ

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

2) 2-S1 (埋桶)

イネ属型を含むイネ科が優占し、他は樹木花粉も草本花粉も低率である。樹木花粉ではマツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属、草本花粉ではアカザ科ヒュ科、アブラナ科、ソバ属などが出現する。

3) 3-S5 (湿地?) の23層

イネ科が優占し、樹木花粉のマツ属複維管束亜属、草本花粉のアカザ科ヒュ科、ヨモギ属、アブラナ科、ソバ属などが伴われる。

4) 4-S3 (埋甕)

極めて花粉が少なく、特徴が示されない。

5. 種実同定

(1) 方法

種実の分離抽出は以下の方法で行った。

1) 試料(堆積物)を0.25mm篩を用いて水洗選別を行う。

2) 残渣を肉眼および実体顕微鏡で観察し、同定計数を行う。

同定は形態的特徴および現生標本との対比を行い、同定レベルによって種、属、科などの階級で分類する。出土した単体試料等においても肉眼および実体顕微鏡で観察し同定を行う。

(2) 結果

1) 2-S1 (埋桶)

16層、17層、18層西端は種実が少ない。食用となる種類はキチゴ属、ウリ類がわずかに検出された。他にヒサカキ属、カヤツリグサ科、アカザ属が検出された。

2) 3-S5 (湿地?) の23層

ナデシコ科が多く、アカザ属、カヤツリグサ科、カタバミ属、ナス科がへ伴われ、タカサブロウ、キク科も出現した。

6. トイレ遺構の可能性について

2-S1 (埋桶)、3-S5 (湿地?)、4-S3 (埋甕) の分析結果では、2-S1 (埋桶) からやや高密度の寄生虫卵が検出された。花粉分析結果では、2-S1 (埋桶)、3-S5 (湿地?) において、イネ科が優占し、食物と関連するものとしてはアブラナ科とソバ属が低率に出現した。4-S3 (埋甕) は寄生虫卵が出現せず、花粉は極めて低密度であった。種実同定結果では、2-S1 (埋桶) から少量の種実が検出され、食用となる種類もわずかに検出された。3-S5 (湿地?) はナデシコ科を主とし雑草類ばかりであった。

以上からみて、2-S1 (埋桶) の堆積物は糞便を比較的多く含むとみなされ、2-S1 (埋桶) はトイレ遺構である蓋然性を持つ。3-S5 (湿地?) では、寄生虫卵の汚染があり、糞便が汚染的に混ざるような環境であった。種実は雑草類のみであるため、トイレ遺構ではないと推定される。4-S3 (埋甕) は寄生虫卵が出現せず花粉もあまり含まれていないが、埋甕である瓦質土器に灰色から褐色の付着物もあり、小便器であった可能性が示唆される。

7. 炭化種実、炭化物の同定結果

(1) 方法

炭化種実は、比較的多量であり、試料によっては板状の炭化材が付着していた。形態を実体顕微鏡で観察し、同定を行った。炭化種実はいずれも同種のものの塊であった。重さを計った。

(2) 結果

同定結果を表5に示す。同定されたのは、イネ（コメ）とヒエであった。以下に特徴を記す。

1) イネ *Oryza sativa* L. 果実（炭化米） イネ科

炭化しているため黒色である。長橢円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。焼けているため、形態が不鮮明になっているものがあり、表には？を付けた。

2) ヒエ *Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno 果実 イネ科

穎（芻穎）の付いた状態のもので、円形を呈し、表面には微細な縱方向の模様がある。

3) その他

他に纖維塊や植物遺体片があるが同定には至らなかった。写真に示す。

(3) 観察結果について

コメ（炭化米）とヒエは同種のものの塊であり、板材が付着するものがあるため、同種のものが櫃などの容器に入れて保存されていたとみられる。

8. 炭化材の樹種同定

(1) 方法

試料は割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によつて75～750倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

2) 結果

結果は表6に示し、分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

1) マツ属複管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複管束亜属に同定される。マツ属複管束亜属にはクロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する。常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

2) 不明 unknown

本試料には、木材は含まれていない。

(3) 所見

ニヨウマツ類（マツ属複維管束亞属）の板材であり、穀類が付着しているため、マツ材でできた容器の可能性がある。

参考文献

- Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard (1992) Methods for Extracting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. Journal of Archaeological Science, 19, p.231-245.
- 金原正明・金原正子 (1992) 花粉分析および寄生虫、藤原京跡の便所遺構—藤原京7条1坊一、奈良国立文化財研究所、p.14-15。
- 金子清俊・谷口博一 (1987) 線形動物・扁形動物・医動物学、新版臨床検査講座、8、医歯薬出版、p.9-55。
- 中村純 (1973) 花粉分析、古今書院、p.82-110。
- 金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原、新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262。
- 島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態、大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集、60p。
- 中村純 (1980) 日本産花粉の標微、大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p。
- 中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*)を中心として、第四紀研究、13, p.187-193。
- 中村純 (1977) 稲作とイネ花粉、考古学と自然科学、第10号、p.21-30。
- 金原正明・松井章・金原正子 (1994) 便所堆積物から探る古代人の食生活、助成研究報告(平成4年度)、財団法人味の素食の文化センター、p.35-48。
- 笠原安夫 (1985) 日本雑草図説、養賢堂、494p。
- 佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.20-48。
- 佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.49-100。

表1 紙團町遺跡における寄生虫卵分析結果

学名	和名	分類群				3-S5(湿地?)	4-S3(埋甕)	
		16層	17層	18層中央	18層東端		23層	埋土上 埋土下
<i>Helminth eggs</i>	寄生虫卵							
<i>Ascaris</i>	圓虫卵	9	10	23	52	88	16	
<i>Trichuris</i>	鞭虫卵	1	2	4	21	27	7	
<i>Clonorchis sinensis</i>	肝吸虫卵				2			
<i>Metagonimus-Heterophyes</i>	異形吸虫卵	3			4	4	5	
<i>Diphyllobothrium nihonkaiense</i>	日本游裂頭条虫卵				1			
<i>Diphyllobothrium mansoni</i>	マンソン裂頭条虫卵		1		1			
<i>Unknown eggs</i>	不明虫卵				1			
Total	計	13	13	30	79	119	28	() ()
	試料1cc中の寄生虫卵密度	2	2	2	3	3	2	() ()
		2.1×10	1.2×10	3.9×10	1.1×10	1.3×10	3.4×10	() ()
	明らかな消化残渣	()	()	()	()	()	()	() ()

表2 紫園町遺跡における花粉分析結果(1)

学名	和名	2-SI (周囲)					
		16層	17層	18層	中央	18層東端	18層西端
Arboreal pollen	樹木花粉						
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複被葉系木立	17	3	20	8	6	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	5	1	2	1	1	
<i>Betula</i>	カバノキ属	1					
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属・アサガ						
<i>Castanea crenata</i>	クリ	2	3	1	1		
<i>Castanopsis</i>	シナ属	1		1	2	1	
<i>Fagus</i>	ブナ属						
<i>Quercus subgen. Lepidobalanoides</i>	コナラ属コナラ属	22	1	6	6	27	
<i>Quercus subgen. Cyclobalanoides</i>	コナラ属カガシ属	6	2	1	3	1	
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属	2					
<i>Vitis</i>	ブドウ属	2	1	10			
<i>Parthenocissus tricuspidata</i>	ツタ					1	
<i>Ericaceae</i>	ツツジ科					1	
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属・ガマズミ属					1	
Arboreal + Nonarboreal pollen	樹木・草木花粉						
Moraceae-Urticaceae	クワ科・イクラク科						
Leguminosae	マメ科			1	2	3	
Nonarboreal pollen	草木花粉						
<i>Typha-Spartinae</i>	ガマ属・ミクリ属						
<i>Alliaceae</i>	サツキモガタ属	1					
Gramineae	イネ科	221	141	252	280	260	
Oryza type	イネ属	9	14	4	8	14	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	3	4	8	14		
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ科サナエチダ属	1	2	1	1	3	
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	8	2	4	4	5	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科・ヒユ科	9	9	12	7	10	
Caryophyllaceae	ナデシコ科	5	9	6	4	8	
Ranunculaceae	キンポウゲ属			1			
Crociaceae	アブリコス科	8	12	9	8	16	
Sapindaceae	ワレモコウ属	1					
<i>Holoptilis-Myrsiphyllum</i>	アリトロウガシ属・フツモ属			1	1		
Hydrocotylaceae	チドリグサ属			1			
Apioideae	セリ科				2	2	
Labiatae	シソ科	1		2			
Plantago	オオバコ属	1			1		
Valerianaceae	オミナエシ科	1	1	1			
Lactucidae	タンポポ科	6	4	3	2	2	
Asteridae	キク科	2	3	3	4	4	
Xanthium	オナシミ属			1			
Artemisia	ヨモギ属	19	16	26	32	20	
Caricaceae-Dicotyledon	ベニバナ						
Fern spore	シダ植物孢子						
Moscovite type spore	单轴黑云母	2	12	2	3	4	
Tritole type spore	三轴黑云母	2	2	3	1		
Arboreal pollen	樹木花粉	58	11	41	22	38	
Arboreal + Nonarboreal pollen	樹木・草木花粉	1	0	0	2	3	
Nonarboreal pollen	草木花粉	294	219	364	367	346	
Total pollen	花粉总数	353	230	405	391	387	
	試料1cc中の寄生虫卵密度	4	3	4	4	4	
		1.1×10^3	2.1×10^3	2.1×10^3	4.4×10^3	1.7×10^3	
Unknown pollen	未同定花粉	8	0	5	1	4	
Foreign spore	シダ植物孢子	4	14	5	4	4	

表3 紫園町遺跡における花粉分析結果(2)

学名	和名	分類群		3-SI (周囲)	4-SI (周囲)
		16層	25層		
Arboreal pollen	樹木花粉				
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複被葉系木立	44			
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	2			1
<i>Betula</i>	カバノキ属				
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属・アサガ				
<i>Castanea crenata</i>	クリ	7			
<i>Castanopsis</i>	シイ属				
<i>Fagus</i>	ブナ属	2			
<i>Quercus subgen. Lepidobalanoides</i>	コナラ属コナラ属	6			
<i>Quercus subgen. Cyclobalanoides</i>	コナラ属カガシ属	12		1	
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属	1			
<i>Vitis</i>	ブドウ属				
<i>Parthenocissus tricuspidata</i>	ツタ				
<i>Ericaceae</i>	ツツジ科				
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属・ガマズミ属				
Arboreal + Nonarboreal pollen	樹木・草木花粉				
Moraceae-Urticaceae	クワ科・イクラク科		2		
Leguminosae	マメ科				
Nonarboreal pollen	草木花粉				
<i>Typha-Spartinae</i>	ガマ属・ミクリ属	1			
<i>Alliaceae</i>	サツキモガタ属				
Gramineae	イネ科	196	2	1	
Oryza type	イネ属	5	1		
Cyperaceae	カヤツリグサ科	9			
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ科サナエチダ属	7			
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	6		1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科・ヒユ科	51			
Caryophyllaceae	ナデシコ科	20	1	1	
Ranunculaceae	キンポウゲ属	1			
Crociaceae	アブリコス科	8	3	4	
Sapindaceae	ワレモコウ属				
<i>Holoptilis-Myrsiphyllum</i>	アリトロウガシ属・フツモ属				
Hydrocotylaceae	チドリグサ属	2			
Apioideae	セリ科				
Labiatae	シソ科				
Plantago	オオバコ属				
Valerianaceae	オミナエシ科				
Lactucidae	タンポポ科	2	1	1	
Asteridae	キク科	4			
Xanthium	オナシミ属				
Artemisia	ヨモギ属	25		7	
<i>Carthamus tinctorius</i>	ベニバナ	2			
Fern spore	シダ植物孢子				
Moscovite type spore	单轴黑云母	17	13	5	
Tritole type spore	三轴黑云母	10	1	1	
Arboreal pollen	樹木花粉	76	1	1	
Arboreal + Nonarboreal pollen	樹木・草木花粉	2	0	0	
Nonarboreal pollen	草木花粉	340	3	16	
Total pollen	花粉总数	418	9	17	
	試料1cc中の寄生虫卵密度	2			
		5.0×10^3	7.2×10^3	1.5×10^3	
Unknown pollen	未同定花粉	7	0	0	
Fern spore	シダ植物孢子	270	14	6	

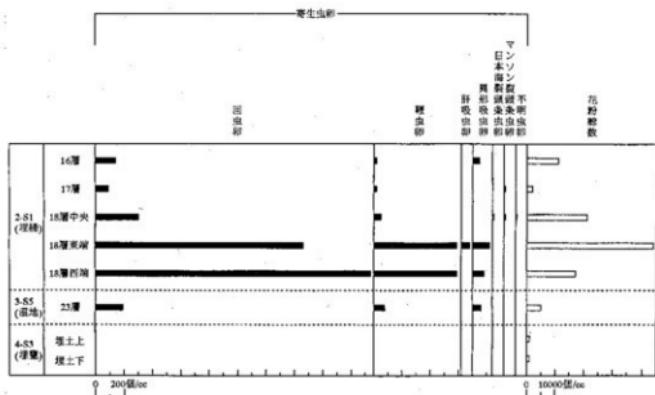


図1 祇園町遺跡、2-S1・3-S5における寄生虫卵分析ダイアグラム

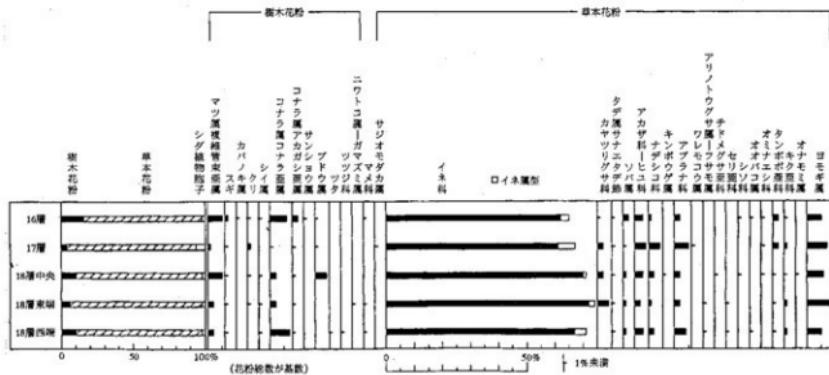


図2 祇園町遺跡、2-S1における花粉ダイアグラム

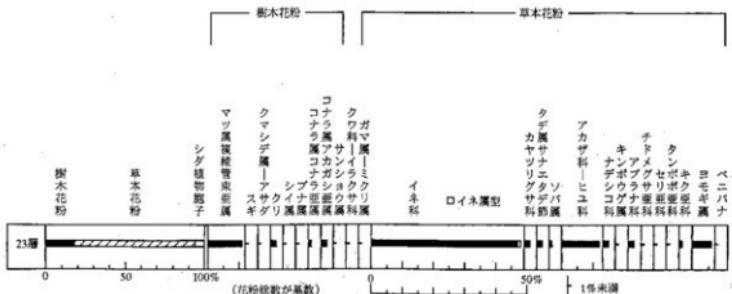


図3 祇園町遺跡、3-S5における花粉ダイアグラム

表4 紙園町遺跡種実同定結果

学名	和名	部位	2-S1-16層 (200cc中)	2-S1-17層 (200cc中)	2-S1-18層(四) (200cc中)	3-S5-23層 (180cc中)
			(200cc中)	(200cc中)	(200cc中)	(180cc中)
arbor	樹木					
<i>Rubus</i>	キイチゴ属	核	1		1	
<i>Eurya</i>	ヒサカキ属	種子	1			
herb	草本					
<i>Cyperaceae</i>	カヤツリグサ科	果実	2		3	4
<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	1			6
<i>Caryophyllaceae</i>	ナデシコ科	種子				25
<i>Oxalis</i>	カタバミ属	種子				2
<i>Solanaceae</i>	ナス科	種子				2
<i>Cucumis melo L.</i>	ウリ類	種子			1	
<i>Eclipta prostrata L.</i>	タカサゴロウ	果実				1
Composite	キク科	果實				1
Total	合計		5	0	5	41
Unknown	不明		1	0	2	2

表5 紙園町遺跡出土炭化種実の同定結果

試験番号	分類群	重量(g)	備考
3-S2		1.39	褐色塊
3-S3-3		77.35	土器片
3-S5-A		1.83	植物遺体片
3-S5-B		1.14	植物遺体片
3-S2-11	イネ <i>Oryza sativa L.</i> 果実?	19.39	
4-S2-22-A	イネ <i>Oryza sativa L.</i> 果実	70.50	炭化材付着
4-S2-24-A	ヒエ <i>Echinocloa utilis Ohwi et Yabuno</i> 果実	119.81	
4-S2-24	ヒエ <i>Echinocloa utilis Ohwi et Yabuno</i> 果実	11.50	
4-S2-28-A	イネ <i>Oryza sativa L.</i> 果実	21.88	炭化材付着
4-S2-28	イネ <i>Oryza sativa L.</i> 果実	101.12	
4-S2-28	イネ <i>Oryza sativa L.</i> 果実	8.22	糠混じり
4-S2-29-A	イネ <i>Oryza sativa L.</i> 果実	60.31	
4-S2-29	イネ <i>Oryza sativa L.</i> 果実	8.14	
4-S2-30	イネ <i>Oryza sativa L.</i> 果実	88.05	糠混じり
4-S2-30	イネ <i>Oryza sativa L.</i> 果実	117.78	糠混じり
4-S2-31-A	イネ <i>Oryza sativa L.</i> 果実?	105.64	
4-S2-31-B	イネ <i>Oryza sativa L.</i> 果実	14.71	炭化材付着
4-S2-31	イネ <i>Oryza sativa L.</i> 果実	72.59	
4-S2-31	イネ <i>Oryza sativa L.</i> 果実	52.11	糠混じり
4-S2-32	イネ <i>Oryza sativa L.</i> 果実	9.08	
4-S2-32	イネ <i>Oryza sativa L.</i> 果実	34.49	糠混じり
4-S2-38-A	イネ <i>Oryza sativa L.</i> 果実	9.13	炭化材付着
4-S2-38-B	イネ <i>Oryza sativa L.</i> 果実?	20.07	
4-S2-38-C	イネ <i>Oryza sativa L.</i> 果実	12.62	
4-S2-38	イネ <i>Oryza sativa L.</i> 果実	35.74	炭化材付着
4-S2-38	イネ <i>Oryza sativa L.</i> 果実	30.04	糠混じり
4-S2-46-A	イネ <i>Oryza sativa L.</i> 果実	126.60	炭化材付着
4-S2-46-B	イネ <i>Oryza sativa L.</i> 果実	89.95	
4-S2-46-C	イネ <i>Oryza sativa L.</i> 果実?	16.29	
4-S2-46-D	イネ <i>Oryza sativa L.</i> 果実	33.25	
4-S2-46	イネ <i>Oryza sativa L.</i> 果実	93.51	炭化材付着

表6 紙園町遺跡出土炭化材の樹種同定結果

試 料 (取り上げNo.)	樹 種 (和 名 / 学 名)
4-S2-22A	マツ属複維管束亞属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4-S2-28A	マツ属複維管束亞属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4-S2-29	不明 unknown
4-S2-30	マツ属複維管束亞属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4-S2-31A	マツ属複維管束亞属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4-S2-38A	マツ属複維管束亞属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4-S2-46A	マツ属複維管束亞属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>